年報

# 津山弥生の里

第７号（平成10年度）

２０００

津山弥生の里文化財センター

# 序

平成10年度の年報「津山弥生の里」が完成しました。本年報も早いもので、今回で第7号となります。情報公開がいわれる今、できるだけ本センターの活動内容をわかりやすくご報告できればと毎号改善を重ねてはおりますが、まだまだ不十分な点も多いかと存じます。ご批判、ご意見をいただければ幸いです。

さて、昨年度は本センターにとって遺跡の保存、活用という点でひとつの節目であったと思います。一つには、永年の懸案であった史跡津山城の保存整備計画に一定の方向が定まり、津山城整備推進係が創設され、実態として動きだしたことがあります。

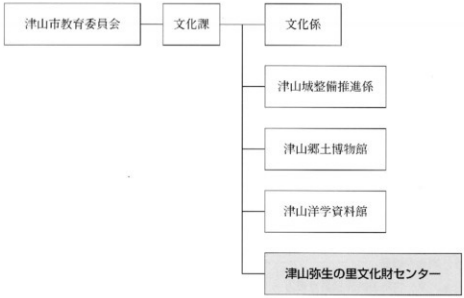
いま一つとして、重要遺跡である日上畝山古墳群の確認調査が終了し、保存活用への第一歩となるはずの津山市指定が実現したことがあります。いずれも小さな第一歩ではありますが、ここにいたるまでに実に多くの人々のご協力、ご支援が得られたからこそと感謝しております。

今後、事業の推進にあたり多くの困難が予測されますが、20年先、30年先をみすえて、着実に歩んでいきたいと存じます。

平成12年3月31日

津山弥生の里文化財センター
所長　中山　俊紀

## 津山弥生の里文化財センター機構図




津山弥生の里文化財センター職員配置（H 12．3．31現在）

| | |
|---|---|
| 所　長 | 中山　俊紀 |
| 次　長 | 安川　豊史 |
| 主　査 | 行田　裕美（津山城整備推進係長兼務） |
| 主　任 | 小郷　利幸 |
| 主　事 | 平岡　正宏（津山城整備推進係兼務） |
| 〃 | 川村　雪絵 |
| 嘱託員 | 野上　恭子 |
| 〃 | 岩本えり子 |
| 〃 | 江見　祥生 |
| 〃 | 家元　弘子 |
| 〃 | 神田　久遠 |
| 臨　時 | 三谷　順子（H 10．12．1～H 11．7．31） |
| 〃 | 仁木　智子（H 11．4．1～H 11．11．30） |
| 〃 | 上原　恵美（H 11．4．1～H 11．11．30） |
| 〃 | 岩本　美紀（H 11．8．1～H 12．3．31） |

# 目　　次


1．津山弥生の里文化財センター事業概要 …… 1
（1）展示事業 …… 1
a．入館者数 …… 1
b．民俗資料の整理 …… 2
c．民俗資料紹介 …… 2
d．民俗資料の復元 …… 3
e．啓発・普及活動 …… 10
f．寄贈資料 …… 10
（2）文化財センター日誌抄 …… 11
（3）埋蔵文化財発掘調査 …… 13
（4）その他の事業 …… 15
（5）調査の概要 …… 16
a．東一宮峪遺跡発掘調査報告 …… 17
2．資料紹介・研究ノート …… 38
（1）津山の弥生土器4 …… 39
（2）津山城今昔③～再建天守と博覧会～ …… 56


## 例　　言

1．本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成10年度に実施した事業概要などについてまとめたものである。

1．平成10年度の埋蔵文化財発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、川村雪絵、出土遺物の整理は上記の他、野上恭子、岩本えり子、家元弘子、民俗資料の整理は江見祥生が主として担当した。本書の執筆は各担当者がおこない、編集は小郷がおこなった。

# 1．津山弥生の里文化財センター事業概要

## （1）展示事業

**◆入館者数**

当センターが開館してから、今年は9年目を迎え、入館者数は平成10年度末現在で延べ50,871人に達しました。また10年度は、4月1日より入館料金が無料になり、利用者数は9年度よりやや増加しています。なお、今回より統計の仕方が変わりました。一般、老人の項は大人に、小・中、高・大は学生にまとめました。

昨年度の入館者数は下表のとおりです。

平成10年度総利用者数内訳

| 区分／月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 年間合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大　人 | 247 | 285 | 215 | 135 | 282 | 134 | 137 | 148 | 138 | 62 | 69 | 101 | 1,953 |
| 学　生 | 311 | 502 | 159 | 57 | 181 | 139 | 316 | 79 | 16 | 131 | 26 | 398 | 2,315 |
| 合　計 | 558 | 787 | 374 | 192 | 463 | 273 | 453 | 227 | 154 | 193 | 95 | 499 | 4,268 |

利用団体数及び人数

| 団体数 | 6 | 7 | 6 | 1 | 1 | 2 | 6 | 2 | 1 | 3 | 0 | 4 | 39 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人　数 | 266 | 438 | 213 | 33 | 41 | 118 | 308 | 98 | 66 | 92 | 0 | 363 | 2,036 |

団体の内訳

| 月 | 日 | 団体名 | 人数 |
|---|---|---|---|
| 4 | 12 | 小野市民間団体 | 39 |
| | 26 | 久米町一色子供会 | 15 |
| | 28 | 高倉小学校　5・6年 | 41 |
| | 28 | 院庄小学校　6年 | 44 |
| | 28 | 作東町芳野小学校 | 15 |
| | 30 | 勝山小学校　6年 | 112 |
| 5 | 1 | 弥生小学校　6年 | 119 |
| | 8 | 誠道小学校　6年 | 30 |
| | 8 | 高野小学校　5年 | 94 |
| | 8 | 鏡松小学校　6年 | 14 |
| | 23 | 一宮小学校　3年 | 43 |
| | 27 | 勝間田小学校　6年 | 90 |
| | 28 | 岡山大学 | 48 |
| 6 | 6 | 一宮小学校　ＰＴＡ | 59 |
| | 11 | 阿波小学校 | 13 |
| | 12 | 吉野小学校 | 21 |
| | 13 | 成名小学校　ＰＴＡ | 32 |
| | 23 | ときわ学園 | 35 |
| | 27 | 美川小学校　ＰＴＡ | 53 |
| 7 | 12 | 観光協会 | 33 |
| 8 | 29 | 藤部来楽友会 | 41 |
| 9 | 18 | 河辺小学校　6年 | 78 |
| | 20 | 備陽史探訪の会 | 40 |
| 10 | 6 | 南小学校 | 60 |
| | 9 | 佐良山小学校　3年 | 58 |
| | 23 | 加茂小学校　6年 | 67 |
| | 30 | 赤坂町立緑分小学校　5・6年 | 51 |
| | 30 | 弥生小学校　5年 | 32 |
| | 30 | 広戸小学校 | 40 |
| 11 | 10 | 東中学校 | 67 |
| | 18 | 香川県大川町大川老人ホーム | 31 |
| 12 | 6 | 倉敷徒歩の会 | 66 |
| 1 | 26 | 弥生小学校　3年 | 31 |
| | 28 | 弥生小学校　3年 | 31 |
| | 29 | 弥生小学校　3年 | 30 |
| 3 | 16 | 鶴山小学校　3年 | 128 |
| | 16 | 林田小学校　3年 | 100 |
| | 16 | 弥生小学校　4年 | 102 |
| | 23 | 弥生小学校　3年 | 33 |

◆民俗資料の整理

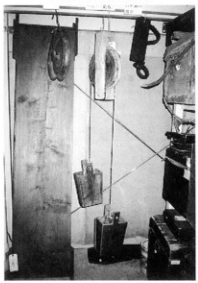
今年度は次のような活動を行いました。

①「釣瓶」を使用時の状態に近い形で展示しました。

②旧家の「箱段」（箱梯子）を展示しました。

今年も民俗資料及び展示に関する貴重な御意見を各方面からたくさんいただきました。有り難うございました。（江見祥生）

「釣瓶」の展示風景



「箱段」の展示風景

◆民俗資料紹介

今回は「臼輪」を紹介します。

「臼輪」とは胴搗き臼や唐臼で、米、麦を搗くとき、搗き具合が均等になるよう、またその循環を善くする為、穀粒を外に飛び出させない為に臼の中に入れる丸い輪です。（麦用は、わらじを長くして丸めたような形をしています）

下の写真は当センター所蔵の米用の臼輪ですが、その構造はかなり複雑で、藁をたばね、輪にした上に繩縄を８の字にかけ回し、真ん中を細かく刺し子にして、その上に飾りと縫い目隠しを兼ねて、細い縄が一本中央に掛けてあります。（江見）

◆民俗資料の復元

「灰ふご」の製作過程の記録。

平成10年2月9日、津山弥生の里文化財センターで修理技術習得、作製技術保存の為実施したものである。

「灰ふご」は、灰や籾、肥料等を入れて運ぶ運搬具で、底の手編みの縫い方が難しく時間と手間がかかり、出来の良否は仕事にも影響した。

小縄の代わりにシュロ縄を使った「灰ふご」製作例

製作の為用意したもの。

①繊維を滑らかにして、「へそ」（底の中心）を編むとき、よくなじむようにする為、また縁を折るときに親縄によくなじむようにする為に、軽く木槌で真ん中と株とを打った餅藁を用意する。

②締め込みをよくきかせ、腰の強い品を作る為、棒の上面が平らなコマゲタ（こも編み機）を用意する。

③「耳」を作って親縄を編んだ（3つ編み）。長さは最初5ヒロ半（作り手の体に合わせて）用意し、不足分は編み足す。このうち、灰ふごの縁に編んだのは1ヒロ半位になる。

④次に、編み機の棒に、作り手の握りこぶしの幅で、マジックペン等を使い縄を置く印を3本つける。（コマは3組使う。）

⑤小縄またはシュロ縄を1段目を編むために、親縄の3倍の4ヒロ半を用意し、縄の丁度真ん中に藁を挟み印しにし、コマに巻き付けセットする。

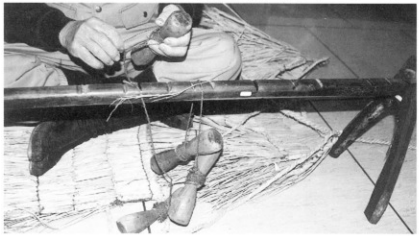
同様に、2段目用に3ヒロ半、3段目用に1ヒロ半の縄を用意する。その他、底を手編みするのに2ヒロ程の縄を用意する。

⑥手縫いの為の竹針、ドンゴロス用針、手鉤。

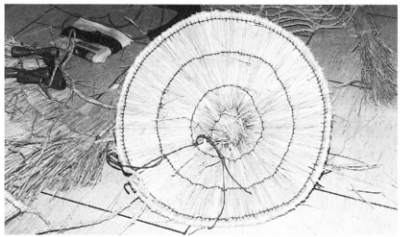
（イ）シュロ縄の真ん中に藁を挟む。

（ロ）コマに巻き、セットする。

（ハ）向かって右から１段目、２段目の縄（写真は２段目の縄をセットしている。）



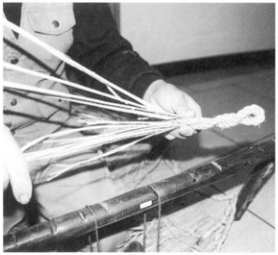
参考写真（縫い終わり、外側から１段目、２段目、３段目のシュロ縄が見える）



①親縄の「耳」の少し下を左手に持ち、右手に持った藁４本程を当てて半分に折り、こも編み機にセットする。

（下図）

（イ）親縄に藁を当てる



(ロ）こも編み機にセットする

②編み始める。

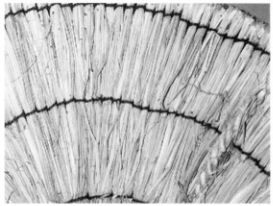
コマは（イ）向かって左から手前のシュロ縄の右へ動かし、指できつく締める。（ロ）手前の縄を返す。1段目と2段目を編んで（締めて）いく。（3組のコマのうち、常に2組だけ編んでいく）このとき1段目と2段目の関係は図（ハ）のようになる。

（下図）

（イ）

（ロ）

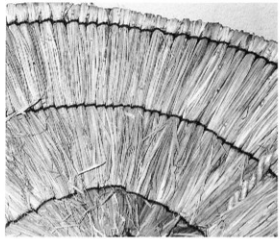
（ハ）1段目と2段目は目がきれないようにする。



③1、2段目を4回繰り返し編み、5回目に1、3段目を編む。これを「へし目にする」といい、目が減るという意味である。

（イ）1段目と3段目を編む

（ロ）「へし目」拡大写真

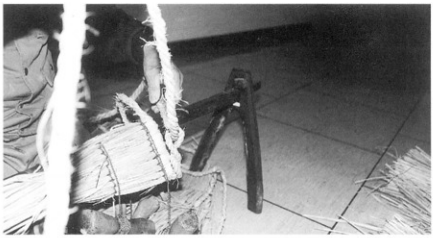


④⑦→③を繰り返す。

⑤③を２回繰り返したところで仮止めを施す。（下図）　これはへし目がだれていかないようにブレーキをかける目的で行う。仮止めはへし目がだれ始めたら行う。

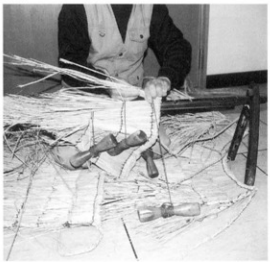
仮止め

⑥「耳」に親縄の端を通して加減をみる。あと親縄ははずしておく。



⑦①～⑤を繰り返す。（イ）適宜、仮止めをかけたりはずしたりして、（ロ）全体を円形にしていく。

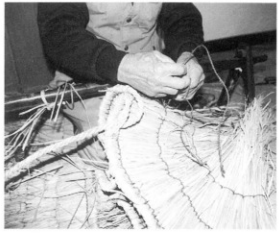
（イ）



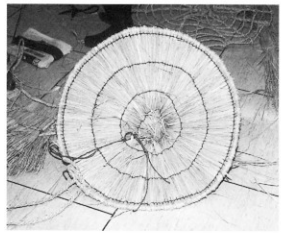
（ロ）

⑧（イ）親縄を「耳」に通して円形にして編み機から外し、縄の終わりをきっちりとかがる。（ロ）両端を綴じ合わせる。

（イ）



（ロ）



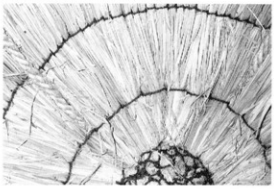
⑨上から底の周囲を押さえて、ふごの形にし、全体の形を整える。

⑩底を手縫いする。まず、ふごを裏返し、内側に藁の端を、２段目の束２つ（１段目の束半分＋１つ＋半分）＋束３つ（半分＋２つ＋半分）を１束にして上に引き上げ手に持ち、シュロ縄で手編みで編む。

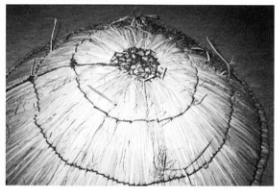
周囲が編めたら、穂先を平らに刈り込みながら、へそに向かって、竹針や手鉤を使い、前に編んだ縄に次の縄を通しながら俵の口を編むように亀甲状に編んでいく。

⑪へその穂先を切り、上から足で踏んで反対側に切り株を出し、へそを編む。

（イ）２段目と３段目の拡大写真



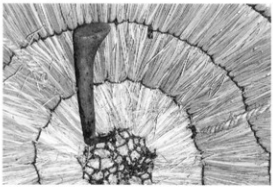
（ロ）へそ外側写真



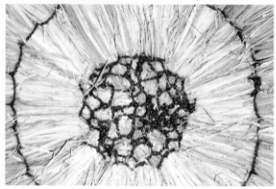
⑫ふごの全体の形を整え、今度は内側から編んで行く。

丈夫にして格好良く仕上げるのがコツ。

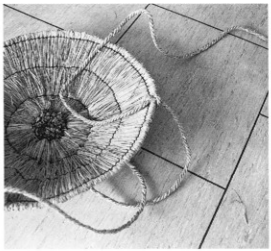
（イ）へそと手鉤



（ロ）へその完成

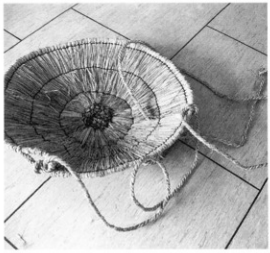


⑬親縄をつま先から腰までの長さの２倍に取り、90°離れた縁にゆるく結ぶ。



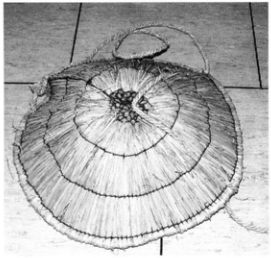
⑭灰ふごを内側から親縄で貫き、「へそ」中央部で90°曲げ、灰ふごを外側から貫いて縁に結ぶ。

（イ）灰ふごの内側から外側に親縄を貫く



（ロ）灰ふご外側から

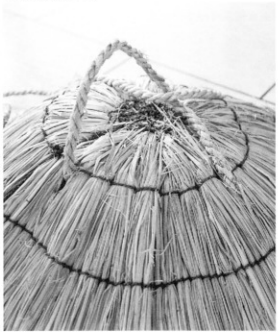
（ハ）同「へそ」付近の親縄



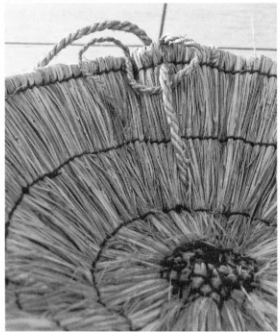
⑮再びつま先から腰までの長さの２倍を取り、縁に結ぶ。

次に灰ふごを貫いて、「へそ」中央部外側でクロスさせ、外→内→外と灰ふごを貫いて綴じ目の親縄に結び付ける。

（イ）灰ふご外側



（ロ）灰ふご内側



⑯綴じ目の親縄に縄端を結び、余りを堅く巻き付けて、持ち手の縄目の間に通し、端を結んで抜けないようにする。

全体を整える。

（イ）余りを堅く巻き付けて完成。　（江見）

◆啓発・普及活動

【刊行物】

◎「年報　津山弥生の里第６号」

◎「荒神峪遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集

◎「有元遺跡・男戸嶋遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集

【講演会・研究会】

★第17回津山市文化財調査報告会

平成11年2月6日(土)　場所 グリーンヒルズ津山リージョンセンター　参加者134名

第１部　調査報告

「津山城の発掘調査」　津山弥生の里文化財センター　平岡正宏

「津山城本丸御殿の機能と構造」　津山郷土博物館　尾島　治

第２部　講　演

「史跡整備のめざすもの～津山城の保存と活用～」　文化財保存計画協会　矢野和之先生

★美作考古学談話会（会員25名）

第1回　5／9（土）「屑野物部伝承と美作の鉄生産」　(行田裕美)

第2回　7／18（土）「二角縁神獣鏡と邪馬台国」　(平岡正宏)

第3回　9／12（土）「古墳はなぜつくられたか―日上畝山古墳群の発掘調査から―」(安川豊史)

第4回　11／7（土）「弥生時代の集落像」　～最近の調査例から～　(小郷利幸)

第5回　1／9（土）「津山城発掘現場現地見学」　(行田裕美)

第6回　3／6（土）「さまざまな祭り」～古墳時代を中心として～　(川村雪絵)

★発掘調査速報展

「津山の歴史を掘る」平成８年度速報展

平成10年4月1日～平成11年3月31日

【田邑丸山古墳群】(津山市下田邑、津山総合流通センター内)

土師器二重口縁壺、直口壺

【河辺小学校裏古墳群】(津山市河辺)

須恵器壺、杯身、杯蓋、ハソウ

【五反田古墳群】(津山市楢)

鉄剣、鉄鏃

【日上畝山古墳群】(津山市日上)

土師器、須恵器、勾玉車、管玉、鉄鏃、鉄鎌、刀子、ヤリガンナ

◆寄贈資料

【民俗資料】

| | |
|---|---|
| 梶岡　辰男 | 前掛、縄モッコ、竹針、コボツ、洗濯板 |
| 梶岡　貞知 | 灰ふご |
| 安藤　幸夫 | 伏竿突き |
| 河野　唯義 | 食器 |
| 金島　雄子 | 棒秤、算盤、木杓子、木盤、茶道本、重箱、柳行季、鞄、その他 |

| | |
|---|---|
| 森安　二子 | 蓮華刈大鎌、ポンプ |
| 國米　博明 | 箱尺、鼓、棹秤、ガス火鉢、茶臼、手鏡、茶釜、鉄瓶、貯金箱、マッチ箱、魔法瓶、旗、皿、徳利、盃、銃筒、足温器、矢、その他 |
| 沢坂　実男 | 指揮刀、軍用長靴 |
| 八幡　優 | 製縄機（木製）、藁切り、中耕機、砕土機、牛の小鞍の蓑、口輪、田打ち鍬、 |
| 百済　道恵 | 板スキー、竹ステック、飯櫃入れ、飯櫃、櫂、蓄音機、算盤、レコード、レコード入れ、箱段（箱梯子）他 |
| 片山　喬平 | 羽子板他 |
| 苅田　次郎 | レコード集、傘 |
| 只友ふさ子 | 行火、摺鉢、滑車、棹秤、寿司型抜き、炭籠 |

【考古資料】

| | |
|---|---|
| 西野　有一 | 環状石斧未製品、磨製石斧状石材 |

## （2）文化財センター日誌抄（平成10年度）

4月 1日　新採用川村事務員着任
4月 7日　沼弥生住居址群で津山やよいライオンズによる遺跡整備寄付贈呈式
4月13日　津山城跡整備計画説明のため愛媛県大洲市議会一行を現地案内
4月14日　市内の登録文化財調査を開始
4月17日　天神原遺跡確認調査に着手
4月20日　高野本郷地内工事立ち会い
4月22日　津山城跡整備幹事会
4月27日　天神原遺跡確認調査終了
5月 1日　上原遺跡他踏査
5月 9日　平成10年度第1回美作考古学談話会「肩野物部伝承と美作の鉄生産」
5月11日　勝央町教育委員会職員遺物整理作業を研修
5月20日　大原町および勝北町、センター視察
5月25日　美作国分寺・日上畝山古墳群等の遺跡案内作成打ち合わせ
6月22日　民俗資料等調査・収集
6月23日　テレビ津山、取材のため来所
6月29日　火きり臼を東小学校に貸し出し
7月 7日　弥生小学校にて弥生土器焼成を指導
7月15日　大澤正己さん来所
7月18日　第2回美作考古学談話会「三角縁神獣鏡と邪馬台国」
7月21日　津山城跡地質排水調査
　　東一宮峪遺跡発掘調査開始
8月17日　沼遺跡草刈り着手
8月19日　火きり臼を弥生小学校に貸し出し

9月 8日　美和山古墳群草刈りと剪定開始
9月12日　第3回美作考古学談話会「古墳はなぜつくられたか－日上畝山古墳群の発掘調査から」
9月13日　中山所長、日上畝山古墳群保存協議のため文化庁に出張
9月21日　津山城備中櫓跡発掘調査着手
9月24日　百済家から民俗資料等搬入
10月 8日　遺跡分布調査（県事業）実施について打ち合わせ
10月12日　総社宮工事立ち会い
10月17日　台風10号来襲、市内全域で水害による被害甚大
　以後、センター職員も当分の間災害復旧作業に従事する
10月18日　佐良山農業研修施設災害復旧作業開始
10月19日　福南公民館復旧作業
　沼遺跡東地区法面崩壊箇所の現地確認
　日上小深田遺跡発掘調査着手
10月23日　中核工業団地古墳公園法面崩壊箇所を現地確認
10月26日　津山城跡発掘調査再開
　以後、災害ゴミ収集作業応援に交代で従事
10月29日　二宮遺跡調査準備協議
11月 2日　中華人民共和国鎮江市訪問団、見学に来所
11月 7日　第4回美作考古学談話会「弥生時代の集落像－最近の調査例から」
11月18日　中山所長、日上畝山古墳群保存協議等のため文化庁他出張
11月25日　国分寺地内住宅建設立ち会い
12月 3日　登録文化財等調査
12月21日　中山所長、全史協臨時大会出席のため東京出張
12月28日　的場古墳群調査協議
1月 6日　住宅建設に伴う津山城跡確認調査開始
1月 9日　第5回美作考古学談話会「津山城跡発掘現場現地見学」
1月12日　津山城跡確認調査終了
1月13日　文化庁磯村調査官および岡山県徳光課長補佐、美作国分寺跡等視察
　日上畝山古墳群、市指定史跡となる
1月16日　津山城備中櫓跡発掘調査現地説明会
1月21日　的場古墳群確認調査準備着手
2月 2日　二宮遺跡発掘調査着手
2月25日　的場古墳群確認調査開始
2月26日　中核工業団地古墳公園法面復旧工事
2月27日　津山城備中櫓跡発掘調査終了
3月 6日　第6回美作考古学談話会「さまざまな祭り－古墳時代を中心として」

## （3）埋蔵文化財発掘調査

平成10年度届出関係一覧

第57条の2第1項

| 遺跡名 | 所在地 | 工事種別 | 期間 | 届出者 | 津山市発番 | 発信日 | 指示事項 | 県文書番号 | 実施日 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 散布地 | 高野本郷2375-8 | 住宅建設 | 5～ | 赤田加造・邦加江 | 津教委文第14号 | 4.1 | 立ち会い | 教文埋126号 | 5.25 | 遺構遺物なし |
| 津山城跡 | 山下89-48 | 住宅建設 | 7.20～11.20 | 杉山敏之 | 津教委文第26号 | 5.14 | 立ち会い | 教文埋254号 | 7.21 | 遺構遺物なし |
| 中原遺跡 | 今井11-15 | 工場建設 | 未定～12.31 | 西日本二菱機械光株式会社<br>代表取締役　山脇浩男 | 津教委文第48号 | 7.1 | 立ち会い | 教文埋497号 | 9.1 | 遺構遺物なし |
| 散布地 | 上田邑2092-9 | 無線鉄塔建設 | 9.10～11.20 | 株式会社デジタルツーカー中国<br>代表取締役　荒木芳生 | 津教委文第53号 | 7.21 | 立ち会い | 教文埋536号 | 10.6 | 遺構遺物なし |
| 散布地 | 上横野4886-8 | 住宅建設 | 未定～1.31 | 高山恵津子 | 津教委文第49号 | 7.21 | 立ち会い | 教文埋544号 | 9.16 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 山北44-1 | 資材置場造成 | 10.15～10.31 | 宏和建設株式会社<br>代表取締役　安東宏悟 | 津教委文第63号 | 8.1 | 立ち会い | 教文埋605号 | 10.16 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 小original1205-3 | 宅地造成 | 11.10～未定 | 松本茂行 | 津教委文第77号 | 9.1 | 立ち会い | 教文埋756号 | 11.9 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 堀坂78-18 | 住宅増築 | 10.25～12.25 | 安冨保光 | 津教委文第79号 | 9.18 | 立ち会い | 教文埋786号 | 10.3 | 遺構遺物なし |
| 散布地 | 池ヶ原66 | 住宅建設 | 12.15～4.30 | 清原昭也 | 津教委文第80号 | 10.2 | 立ち会い | 教文埋906号 | 12.16 | 遺構遺物なし |
| 散布地 | 高野本郷2546-1 | 住宅建設 | 未定 | 松尾　實 | 津教委文第90号 | 10.19 | 立ち会い | 教文埋907号 | 12.22 | 遺構遺物なし |
| 美作国分寺跡 | 国分寺476-3 | 住宅建設 | 11.30～3.20 | 山本照進 | 津教委文第91号 | 10.27 | 立ち会い | 教文埋958号 | 11.25 | 築地塀の一部を確認 |
| 美作国府跡 | 堀坂3-2 | 事務所建設 | 11.16～11.30 | 株式会社クオンティ<br>代表取締役　湯浅　勉 | 津教委文第95号 | 11.2 | 立ち会い | 教文埋1000号 | 11.14 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 総社51-4他 | マンション建設 | 11.30～3.29 | 高橋緑子 | 津教委文第98号 | 11.6 | 確認調査 | 教文埋999号 | 11.17 | 遺構遺物なし |
| 津山城跡 | 山下9番地の5 | 店舗・住宅建設 | 12.30～1.20 | 有限会社竹久旅館<br>代表取締役　竹久垂義 | 津教委文第100号 | 11.10 | 確認調査 | 教文埋1016号 | 11.6～<br>1.12 | 遺構確認 |
| 散布地 | 高野本郷1091-1 | 住宅建設 | 2.10～12.25 | 片山　勲 | 津教委文第118号 | 1.29 | 立ち会い | 教文埋1289号 | 2.16 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 山北373-15 | 住宅建設 | 4.10～9.30 | 平峰孝義 | 津教委文第124号 | 2.8 | 立ち会い | 教文埋1376号 | 4.12 | 遺構遺物なし |
| 美作国府跡 | 総社585-4 | 住宅建設 | 5.1～8.31 | 原山仁喜夫 | 津教委文第130号 | 2.25 | 立ち会い | 教文埋1430号 | 5.7 | 遺構遺物なし |
| 美作国分尼寺 | 日上116 | 住宅建設 | 4.20～6.30 | 光岡美佐子 | 津教委文第135号 | 3.16 | 立ち会い | 教文埋1524号 | 4.22 | 遺構遺物なし |

第57条の3第1項

| 遺跡名 | 所在地 | 工事種別 | 期間 | 届出者 | 津山市発番 | 発信日 | 指示事項 | 県文書番号 | 実施日 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美作国府跡 | 総社128番地他 | 土木道工事 | 9.1～3.31 | 津山市水道事業管理者<br>上木昇司 | 津教委文第46号 | 7.8 | 立ち会い | 教文埋478号 | 12.5他 | 遺物なし |
| 美作国府跡 | 総社87他 | 公共下水道工事 | 9.1～3.31 | 津山市長中尾基弘 | 津教委文第45号 | 7.8 | 立ち会い | 教文埋477号 | 8.18他 | 遺構遺物なし |
| 宮尾城跡群他 | 平福部1216-1他 | 水道施設工事 | 10.1～3.20 | 阪川製紙水道事業組合管理者<br>大川照江 | 津教委文第61号 | 7.30 | 確認調査 | 教文埋608号 | 9.11 | 遺構遺物なし |

第57条の5第1項

| 遺跡名 | 所在地 | 工事種別 | 期間 | 届出者 | 津山市発番 | 発信日 | 指示事項 | 県文書番号 | 実施日 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 的場古墳群 | 金屋387-1他 | 牧場用地造成 | 5.1～ | 石岡　岳 | 津教委文第114号 | 12.28 | 確認調査 | 教文埋1228号 | 2.25～ | 古墳3基 |

◎現地説明会

津山城備中櫓跡

平成11年1月16日（土）　約70名

## （4）その他の事業

**★遺跡の保存・管理**

沼遺跡草刈

美和山古墳群草刈・剪定

井口車塚古墳草刈

正仙塚古墳草刈

中宮古墳草刈

中核工業団地内古墳（一貫東1号墳）公園草刈

**★津山やよいライオンズクラブ奉仕作業**

沼遺跡の草刈

井口車塚古墳

中宮古墳

（5）調査の概要

# 東一宮峪遺跡発掘調査報告

## －宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－

### 1．位置　（第1図）

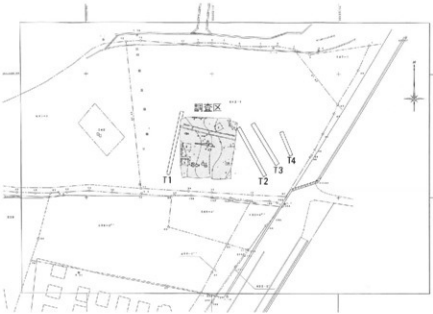
東一宮峪（ひがしいちのみやさこ）遺跡は、岡山県津山市東一宮643－1番地他に所在する。宮川左岸の南北に連なる丘陵稜線部に立地し、隣接する南側一帯の丘陵は「グリーンヒルズ津山」として、温水プール、多目的ホール、広場、駐車場などが整備され、それに先立ち埋蔵文化財の発掘調査も行われている。5遺跡（第1図2～6）が調査され旧石器から近世にいたる遺構、遺物が多数見つかっている（註1）。その中で本遺跡に道を挟んで隣接する大田西奥田遺跡（同2）からは津山市で初となる縄文時代早期の住居跡が1棟見つかっている。東一宮峪遺跡は、標高165～167mで周辺の平野部との比高差は約35mを測る。

第1図　遺跡の位置及び周辺主要遺跡

1　東一宮峪遺跡
2　大田西奥田遺跡
3　大田松山久保遺跡
4　大田大正開遺跡
5　大田茶屋遺跡
6　大田陣子遺跡
7　大田十二社遺跡
8　沼遺跡
9　沼E遺跡
10　京免遺跡
11　竹ノ下遺跡
12　一丁田遺跡
13　押入西遺跡

### 2．調査の経過

本遺跡は個人住宅建設に伴い調査されたものである。宅地造成予定地は周知の遺跡（東一宮峪遺跡）の範囲内に含まれるため、開発事業者




第2図　調査区位置図（S－1：1500）

である全本親民氏と協議し、平成10年1月19日付けの確認調査実施依頼書に基づき、1月29日から30日に遺跡の範囲を確認する確認調査をおこなった。確認調査は第2図のように幅2m程のトレンチを数本いれた。その結果、遺跡の推定範囲がほぼ確定した。また、3月10日付けで「埋蔵文化財試掘調査・確認調査票」を岡山県教育委員会に提出した。その後、開発計画が決まり平成10年6月16日付けで、同氏より文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が文化庁長官に提出された。そのため、再度埋蔵文化財の保護について協議し、平成10年7月14日付けで、「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を同氏と締結し、開発行為の及ぶ遺跡の推定範囲については全面発掘調査することで合意した。それを受け7月21日付け同法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を津山市教育委員会教育長名で文化庁長官宛に提出した。発掘調査は平成10年7月21日から実施した。最初は重機で表土を除去し、その後は人力で遺構の検出・掘り下げをおこなった。8月11日にほぼ遺構の調査が終了したので全体及び個々の遺構の写真撮影、8月12日から遺構の測量調査を行い、8月18日にはすべての調査を終了し、発掘調査器材を撤出した。発掘調査した面積は約570㎡である。

発掘調査は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター主事小郷利幸が担当し、発掘作業は津山市シルバー人材センターにお世話になった。また、発掘調査から報告書作成に至るまで開発事業者である全本親民氏、並びに下記の方々から御指導・御協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

(敬称略)

(発掘作業) 内田久二夫、田口晴道、田島淳太郎、中村　信、橋本　満、脇山　康、川村雪絵、
野上恭子、岩本えり子、家元弘子、上原香里

(整理作業) 野上恭子、岩本えり子、家元弘子、山本有希

### 3．調査の記録

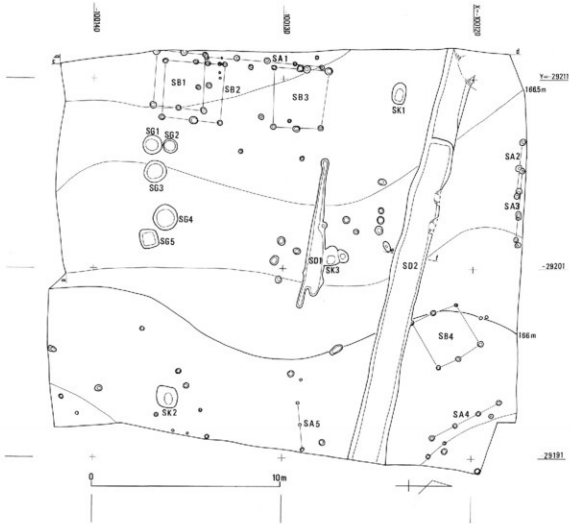
調査区の基本層序として南側と西側の土層図を載せている（第4図）。南壁（a－b）は地山面の上に黒灰色土が1層見られ、その上には造成土がある。地山本来は東側に向かって緩やかに傾斜しているため、この造成土で現地表を水平にしている事がわかる。そして、この造成土は調査区の西側の丘陵部分を削って運んでいるものと考えられる。この事は現地形をみてもわかるが、確認調査によって調査区西側（第2図T1）はすでに削平されている事からも伺える。また、西壁（c－d）の地山面は北に向かって傾斜しており、南壁同様黒灰色土がみられるが、特に北側半分については地山面を掘り込む形でかなり撹乱を受けている。この部分には廃材などが埋められており、その際の重機の爪痕が調査区内でかなり確認されている。そのため、これより北側についてはすでに削平されている部分が多く、また地形的に見ても急な斜面部であるため遺構はほとんど存在しないものと考えられる。また、北東側については、確認調査によって深い谷部を、造成土によって平らにしている事がわかっている（第2図T3～4）。また、この谷部で遺構・遺物は検出していない。以上より遺跡の範囲を推測すると今回調査した部分（同トーン部分）が現存する遺跡の推定範囲と考えられる。

今回の調査で検出した主な遺構は以下の通りである。

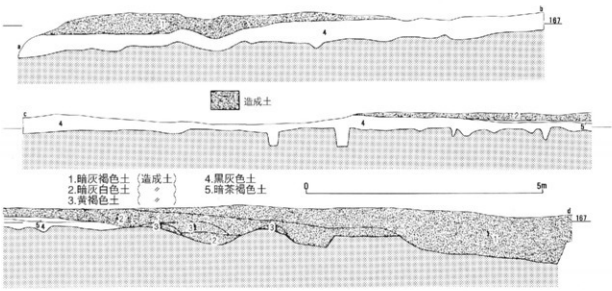
弥生時代…建物跡4（SB1～4）、柱穴列4（SA1～4）、溝1（SD1）、
土壙1（SK3）、柱穴多数。

江戸時代…墓5（SG1～5）

その他（時期不明）…溝1（SD2）、土壙2（SK1～2）




第３図　東一宮峪遺跡全体図（Ｓ＝１：200）




第４図　調査区土層図（Ｓ＝１：80）

（1）弥生時代

**a．建物跡**

建物跡1（ＳＢ1、第5図）

建物跡2と重複している。南北2間、東西1間の建物跡で、柱間は南北2.7ｍ、東西3ｍ、床面積は約8.1㎡、桁行の主軸方向はＮ－7°－Ｅである。柱穴3・5・6から土器片が少量出土しているが図示できるものは無い。

建物跡2（ＳＢ2、第5図）

南北2間、東西1間の建物跡で、柱間は南北3.1ｍ、東西3ｍ、床面積は約9.3㎡、主軸方向はＮ－6°－Ｅである。柱穴6から土器片が少量出土している。

建物跡3（ＳＢ3、第6図）

建物跡2の北3ｍに平行に立地する南北2間、東西1間、柱間は南北2.85ｍ、東西3.15ｍ、床面積は約8.9㎡、主軸方向はＮ－5°－Ｅである。柱穴2より土器片が少量出土している。

建物跡4（ＳＢ4、第6・9図）

南北2間、東西1間の建物跡で、柱間は南北2.55ｍ、東西2.7ｍ、床面積は約6.9㎡、主軸方向はＮ－31°－Ｗで、建物跡1～3とは大きく異なっている。出土遺物は柱穴6から底部片（第9図11）が出土している。

**b．柱穴列**

ここで柱穴列としてとらえているものの複数の柱穴が直線的に並んでいるものを便宜的に呼称している。ただこの中には調査区外に続く可能性のものがあり、建物やその他の施設なるものがある。

柱穴列1（ＳＡ1、第7図）

建物跡1～3と平行に柱穴5個を検出したが、調査区外に柱穴が存在し、建物などになる可能性もある。柱間は1.4～1.6ｍである。主軸方向はおよそＮ－5°－Ｅで、出土遺物は柱穴4から土器片が少量出土している。

柱穴列2（ＳＡ2、第7・9図）

柵列3と平行に存在する3個の柱穴を検出した。これについても調査区外に柱穴が存在して建物などになる可能性も考えられる。柱間は1.4～1.45ｍで、主軸方向はＮ－84°－Ｗ、出土遺物は柱穴2より底部片（第9図12）が出土している。

柱穴列3（ＳＡ3、第7図）

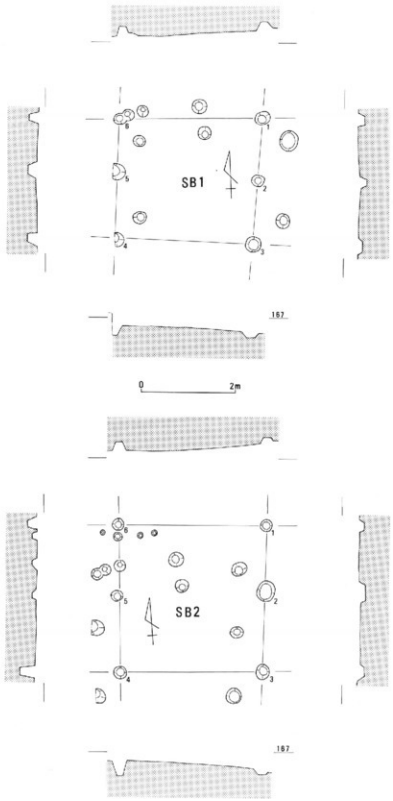
柵列2同様柱穴3個を検出した。建物になね可能性も考えられる、柱間は1.1～1.35ｍ、主軸方向はおよそＮ－85°－Ｗで、出土遺物は皆無である。

柱穴列4（ＳＡ4、第7図）

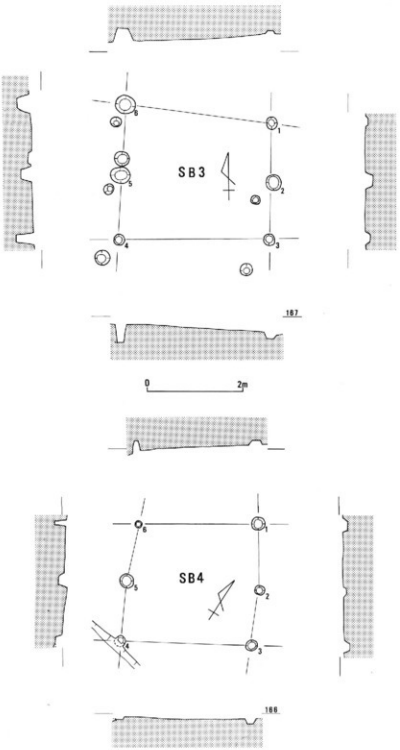
柱穴が4個一列に並んでいる。柱間は1.25～1.4ｍ、主軸方向はＮ－28.5°－Ｗ。柱穴3には対となる可能性のある柱穴があるため、建物になる可能性もある。出土遺物は柱穴2・4から土器片が少量出土している。

柱穴列5（ＳＡ5、第7図）

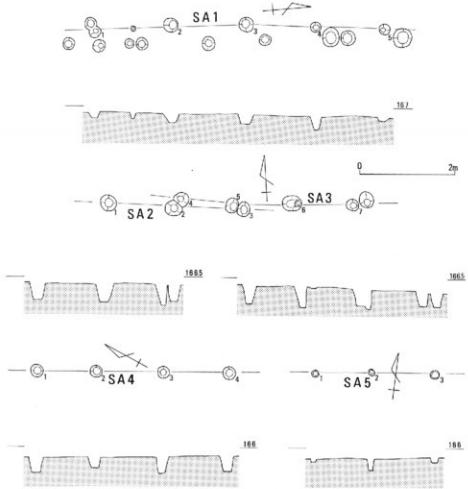
柱穴が3個一列に並んでいるが、調査区の外に続いている可能性がある。深さにはばらつきがあり、柱穴自体も規模が小さい。柱間は1.15～1.35ｍ、主軸方向はＮ－85°－Ｅである。出土遺物は皆無である。




第5図　建物跡1・2 平・断面図（S＝1：80）




第6図　建物跡3・4　平・断面図（S＝1：80）



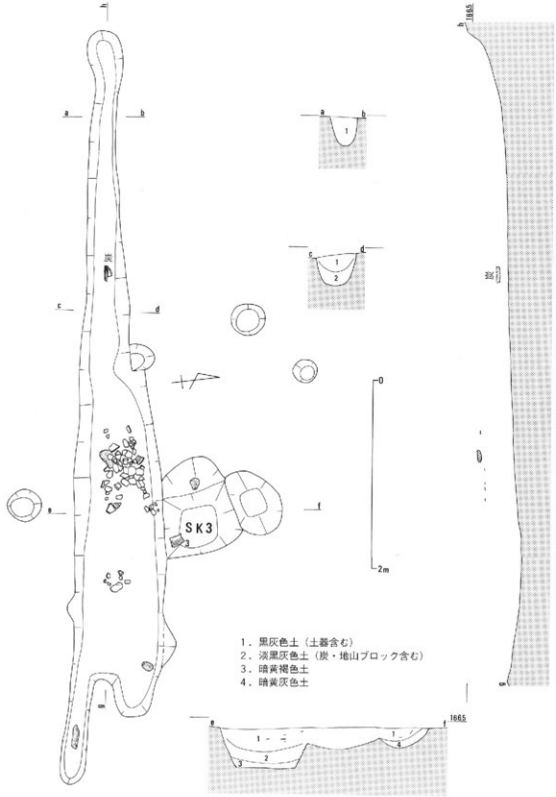

第７図　柱穴列平・断面図（Ｓ＝１：80）

**ｃ．溝**

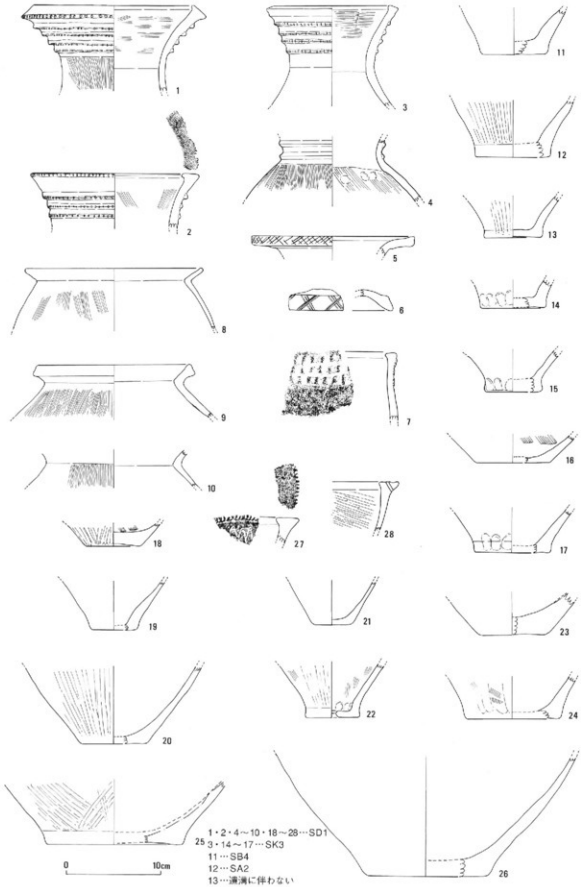
溝１（ＳＤ１、第８・９図）

調査区の中央に等高線に直交する形で溝状遺構が存在する。現状では全長８ｍ、幅は上方で0.25ｍ、最大で0.95ｍを測り、上方の先端は丸くなり、下方に向かって幅がやや広くなる形状である。さらに下方端は細い溝状となっているが、この部分は削平されているため全体の構造は明瞭でない。現状では２条の細い溝状となっている。また３カ所で土層観察を行っている。いずれも黒灰色土などの１～３層の自然堆積と考えられる状況で、床面は上方の細い部分はＵ字形で、下方の幅広となるあたりからはしっかりとした平らとなっている。また、上方からの縦断（ｇ－ｈ）では床面は緩やかなＵ字形となっている。さらに重複する土壙（ＳＫ３）や柱穴との前後関係については、遺構検出時に平面的、さらに土層観察から検討したが明瞭ではない。この土壙３を取り囲む形で半円形に柱穴が存在するため、住居跡の中央穴の可能性も考えられる。ただこれについては柱穴の残り具合に比べ、上方にあるべき住居の掘り込みや壁溝が残っていないのはやや不自然ではある。本溝の埋土内からコンテナ約２箱分の土器片が、下方部分を中心に出土し、また上方付近からやや大きめの炭片が少量出土している。土器は完形に復元できるものは無く、出土状況から破砕されたものなどを廃棄しているようである。また、上器の出土した部分は少量の炭片を含み、また床面などに焼けた形跡も見られない。実測可能な土器については第９図に載せている。

１・２、４～10、18～28が出土遺物である。１・２、４～７は壷で、１・２・４はラッパ状に開く形




第8図　溝1 平・断面図（S＝1：40）




1・2・4～10・18～28…SD1
3・14～17…SK3
11…SB4
12…SA2
13…溝溝に伴わない

第9図　出土遺物（S＝1：4）

態の口縁部で、外面には貼り付けの凸帯が3～4状巡り、その上に刻み目を入れ、2の口縁上面には波状文が施されている。頸部から胴部にかけての外面にタテハケを施している。口縁内面の端部は上方につまみ、胴部にかけてハケを施している。5・6は口縁がラッパ状に開き端部がやや外反ないしは垂れ下がるタイプである。5の口縁端部外面にはヘラ描きの斜格子文、6も3本の線による×の文様が巡っている。7は短頸壺で外面には貼り付けの凸帯が3条巡り、その上を指で押さえている。8～10は甕で、口縁はくの字に屈曲し、9は端部を上下につまんでいる。胴部外面にはタテハケが施されている。27・28は椀状の高杯で27の外面と口縁上面には波状文が施され、28の口縁端部には穿孔が見られる。18～26は底部で22の底には焼成後の穿孔がある。外面はヘラミガキを、内面の調整はハケを施すものがある。

**d．その他**

その他の遺構として土壙や建物などにならない柱穴が多数ある。その中で土壙3は溝1と切り合ってはいるが、両者の前後関係は明瞭でない。土層観察からも切り合関係は明瞭でなく、共存していた可能性もある。出土遺物は第9図の3、14～17で3はラッパ状に開く壺で外面には4条の貼り付け凸帯が巡りその上に刻み目を入れ、内面にはヨコハケが見られる。14～17は底部で16の内面にはハケが見られる。その他、建物などの遺構にならない柱穴から土器片が少量出土しているが、図示できるものはほとんどない。遺構に伴わない遺物として図示できたのは第9図13の底部ぐらいである。

（2）近世

**a．墓**

近世の墓と考えられる土壙墓を5基検出している。調査区の南寄りにほぼ直線的に並んでいる。詳細は第1表を参照のこと。

近世墓1（SG1、第10・11図）

直径0.86m、深さ0.3mの楕円形土壙である。埋土は2層で床面は平らであるが棺痕跡は見られない。下層の床面中央付近から銭貨3、キセル1、ハサミ1、釘3、櫛1、毛抜1が出土し、それの出土状況として拡大図を載せている。それによると、中心部にほぼまとまっておりハサミの上にキセルが置かれ、周辺に銭貨や毛抜が見られる。

近世墓2（SG2、第10図）

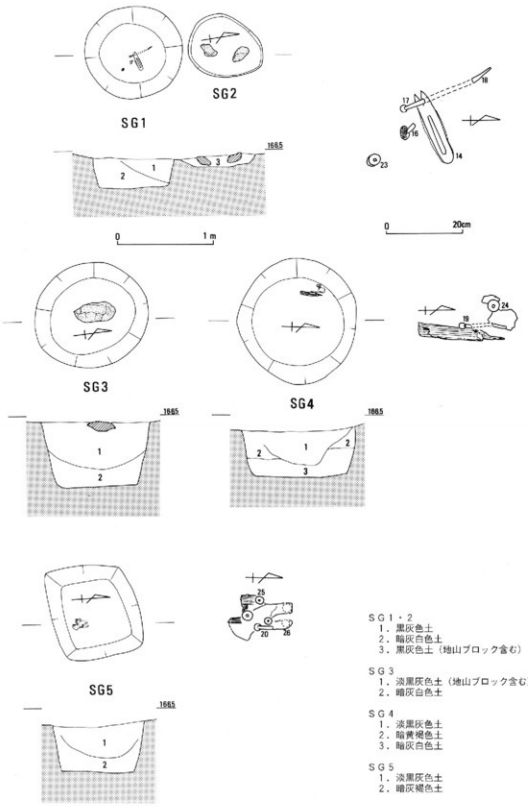
直径0.66～0.78m程のやや不正な円形土壙であるが深さは0.13mとあまりない。埋土は黒灰色土1層で内部に2個の石がある。出土遺物は皆無である。そのため近世墓1とは隣接するものの、墓ではない可能性もある。

近世墓3（SG3、第10図）

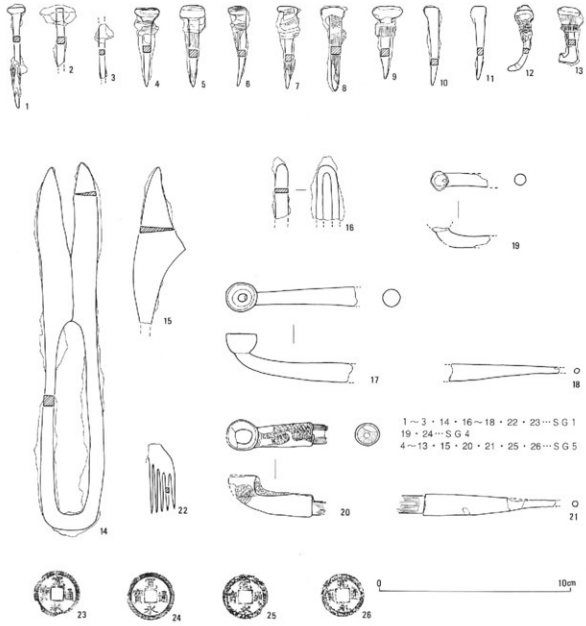
直径1.13m、深さ0.7m程の円形土壙である。埋土は2層で床面は平らであるが棺痕跡は見られない。上部にはかなり大きめの石があり、墓標と考えられる。埋土を精査したが出土遺物は皆無である。

近世墓4（SG4、第10・11図）

直径1.2m、深さ0.47m程の円形土壙である。埋土は3層で床面は平らであるが明瞭な棺痕跡は見られない。下層床面のやや西よりから古銭3、キセル1、木片が出土している。出土状況は棺材と思われる木片がありその周囲にキセルや銭貨がまとまっている。




第10図　近世墓 平・断面図（S＝1：40）及び遺物出土状況（S＝1：10）




第11図　近世墓出土遺物（S＝1：2）

| | 形状 | 規模(m) | | 副葬品など | | | | 銭貨 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 径(一辺) | 深さ | 釘 | 煙管 | 鉄 | その他 | 寛永通寶(新) | 不明 | |
| 1 | 円形 | 0.86 | 0.3 | 3 | 1 | 1 | 櫛・毛抜 | 1 | 2 | 銭貨3枚銹着 |
| 2 | 円形 | 0.78 | 0.13 | | | | | | | |
| 3 | 円形 | 1.13 | 0.7 | | | | | | | |
| 4 | 円形 | 1.2 | 0.47 | | 1 | | | 2 | 1 | 銭貨2枚銹着、棺材片 |
| 5 | 円形 | 0.92～1 | 0.55 | 50以上 | 1 | 1 | | 3 | 4 | 棺材片 |

第1表　近世墓一覧表

近世墓5（ＳＧ５、第10・11図）

一辺0.92～１ｍ、深さ0.55ｍ程の方形土壙である。埋土は２層で床面は平らであるが棺痕跡は明瞭でない。埋土全般から鉄釘が出土し、下層床面やや南よりから銭貨７、キセル１、鋏１が出土している。鉄釘は50本以上であり、この釘の出土状況から、棺は円形ではなく四角で、その製作時に使用されたものと考えられる。遺物の出土状況はやや南よりの棺材片の上にキセルが置かれ銭貨はややばらばらに置かれているようである。

（３）その他

**ａ．溝**

溝２（ＳＤ２、第３・12図）

調査区の北側に東西方向の直線的な溝である。幅1.8ｍ、深さ0.28ｍ、現長22.5ｍを測る。おそらく調査区外にさらに続くものと考えられが、確認調査時のトレンチ１・２（第２図）では検出していないので、東側では自然消滅し、西側ではすでに削平されているものと考えられる。溝は西から東側へと向かって傾斜し、西側の途中でさらに１段落ち込む形となっている。床面は全体的に平らである。中心部付近の土層はほぼ１層（第12図）で、東壁の土層観察からはこの上に現代の水田面が作られている。また、埋土からの出土遺物はほとんど無く（弥生時代の土器片少量）時期は明瞭でない。ただ埋土が弥生時代のものとは異なり、どちらかと言えば近世墓のものに近いため、近世以降のものと推測される。用途としては道のようなものであろう。

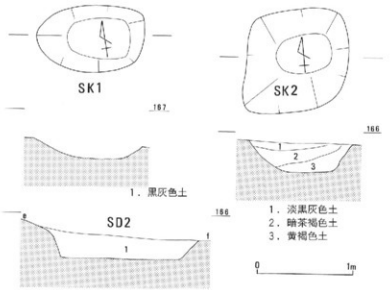
**ｂ．土壙**

土壙１（ＳＫ１、第12図）

長径1.14ｍ、短径0.7ｍの楕円形に近い土壙で、深さ0.2ｍ、断面は緩やかなＵ字形である。埋土は１層で、出土遺物は皆無である。

土壙２（ＳＫ２、第12図）

一辺1.8ｍの方形土壙で深さ0.3ｍ、断面は床面が平らである。埋土は３層で出土遺物は皆無である。

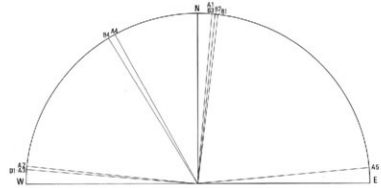



第12図　土壙１・２、溝２ 平・断面図（Ｓ＝１：40）

4．まとめ

今回調査した東一宮峪遺跡は、時期別に見ると弥生時代の集落を中心とし、その他江戸時代の墓地がある。

弥生時代の集落の時期については、溝１から出土した土器の内、広口壺（第９図１～３）の特徴が時期決定の目安となる。周辺の大田西奥田遺跡（註１）、大田大正開遺跡（註１）、沼Ｅ遺跡（註２）、紫保井遺跡（註３）、三毛ケ池遺跡（註４）、男戸嶋遺跡（註５）などに類例があり、土器編年では概ね弥生時代中期の中頃（註６）と考えられる。その他の器種もほぼ同時期と考えて差し支えはない。その中で７の短頸壺はやや古相の特徴を示し、美作地方では類例が少なく先の大田西奥田遺跡にあるぐらいである。その他の遺構については、土器片も少なく時期決定は明瞭でないが、ほぼ近接したした時期の所産と推測される。弥生時代の集落構成では明瞭な住居跡は検出していないが、建物跡（１間×２間）が４棟と柱穴列などが存在する。この柱穴列の中には柱穴列１～４のように建物になる可能性のものもある。また、建物と柱穴列は主軸の方向で分類できる。建物跡と柱穴列の主軸方向を比較したのが第13図である。これによると建物跡１～３と柱穴列１～３・５は主軸の方向が同じか直交関係に近く一連のものと推測される。同様に建物跡４と柱穴列４も一連のものと推測される。これら主軸の違いが時期的なものか、同時に両者が存在していたのかは、出土土器などからも細分できず明瞭でない。ただ、建物１・２は重複するため同時併存はあり得ず、いずれの建物も平面形が正方形に近い特徴がある。その他の遺構としては、溝がある。溝１は全長８ｍ程の溝で内部から弥生土器の破片多数と炭片が少量出土している。この溝の主軸は柱穴列２・３とほぼ同じで、建物１～３と直交関係にある。そのためこれらと同時期の可能性が大きい。この溝の性格については、尾根筋に沿って掘られている事から、建物などに付随する排水用の溝の可能性を考えたが、溝の幅の問題、高低差はさほどない事、さらに内部から




第13図　遺溝全体図（Ｓ＝１：300）と建物・柱穴列・溝の主軸方向

少量であるが炭が出土している事からすると、他の用途、例えば焼成遺構などであった可能性もある。これについては類例の増加をまちたい。また、住居は確認していないが、溝1と切り合う形で住居が存在していた可能性も指摘した。これについては疑問点が多い。

以上より、本集落は建物を中心としたものであるが、集落は全体を調査したわけでないので、これが集落の全容と言うわけではない。ただ、周辺の大出茶屋遺跡や大田松山久保遺跡（註1）では住居に対して建物の比率が大きい集落もあり、これら建物の中には住居として機能していたもの存在が指摘されている。これら遺跡と本遺跡は若干時期が異なるため比較検討は難しいが、今後集落構造を検討する場合の参考となり得る所見ではある。

江戸時代の墓としては5基（その内の1基は墓かどうかは明瞭でない）検出した。墓の構造としては円形のものと方形のものとがある。方形のものからは多数の釘が出土しているため、棺の製作時に使用したものと考えられる。またいずれの墓も骨は残存していないが、棺桶の材が副葬品と共に一部確認できたものがある。出土遺物としては銭貨、キセル、ハサミ、櫛、毛抜きがある。詳細は第1表参照。この内、銭貨は3～7枚で、いずれも「寛永通寶」と考えられる。その中には「新寛永」と呼ばれているものが含まれている。この「新寛永」の「寛永通寶」が1697年以降に鋳造されている事（註7）から、これらお墓は少なくとも1697年以降のお墓と推測されるが、その他の副葬品からも詳細な時期決定はできない。また、隣接する西奥田遺跡では、同時期の土壙墓で火を受け火葬にされたと推測されるものが出土している（註8）。

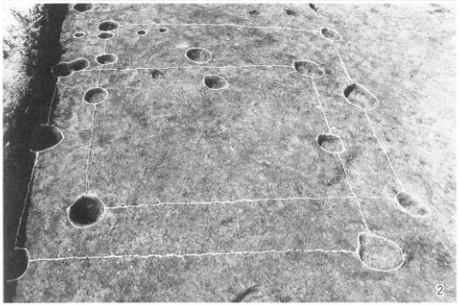
以上、東・宮崎遺跡の時期など概要については判明したが、本来の遺跡の広がりはさらに広範囲に及んでいたものと推測される。事前の確認調査の結果、今回の調査区の東側及び西・南側については造成でかなり削平されているため、遺構はほとんど残存しない。また北側については旧地形は急な斜面であり、北東側は谷部である事から遺跡の広がりはあまり無いものと考えられる。そのためどちらかと言えば、すでに削平されている南・西側に遺跡は広がっていたものと考えられる。（小郷利幸）

註

(1) 岡本寛久他「大田茶屋遺跡2ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129』岡山県教育委員会 1998
(2) 中山俊紀他「沼E遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』津山市教育委員会 1981
(3) 中山俊紀「津山市栗保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備第15集』古代吉備研究会 1993
(4) 小郷利幸「三毛ケ池遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集』津山市教育委員会 1993
(5) 安川豊史「男戸嶋遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集』津山市教育委員会 1999
(6) 中山俊紀「津山の弥生土器1」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター 1996
なお、高橋護氏の山陽地方の編年では中期のⅣａ～ｃ期にわたって見られる器形である。
高橋護「入門講座・弥生土器－山陽1－」『考古学ジャーナル173』ニュー・サイエンス社 1980
(7) 永井久美男『日本出土銭総覧1996年版』兵庫埋蔵銭調査会 1996
(8) 安川豊史「西奥田遺跡発掘調査概要」『年報津山弥生の里第2号』津山弥生の里文化財センター 1995

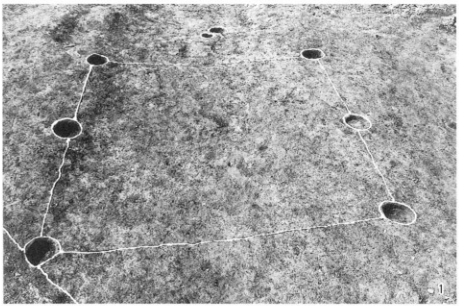
図版 1

1．全景（南西から）

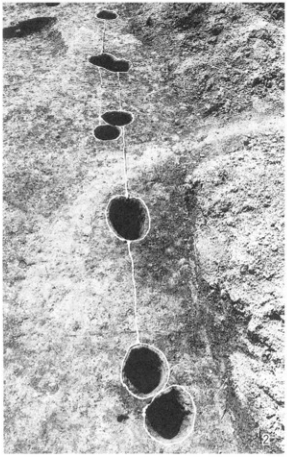


2．建物跡1・2

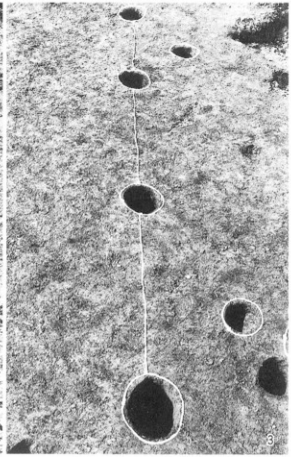
3．建物跡3



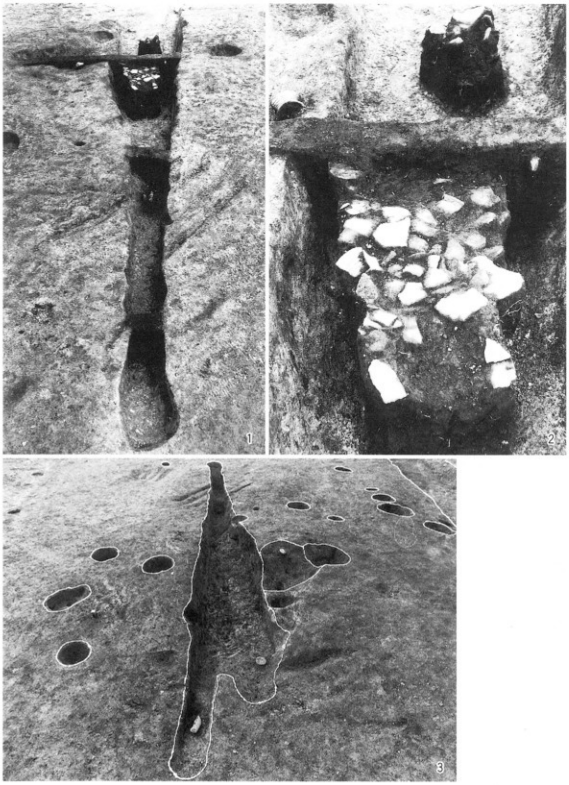
1．建物跡4



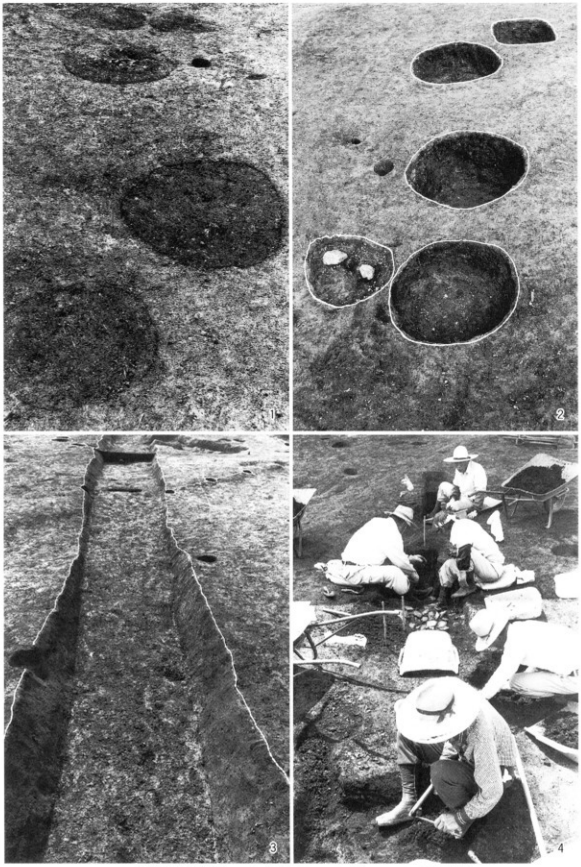
2．柱穴列2・3



3．柱穴列4



1．溝1検出状況　2．遺物出土状況　3．溝1全景



1．近世墓検出状況　2．近世墓　3．溝2　4．調査風景

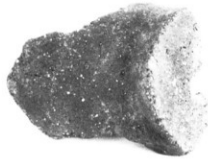
1

7

2

20

2

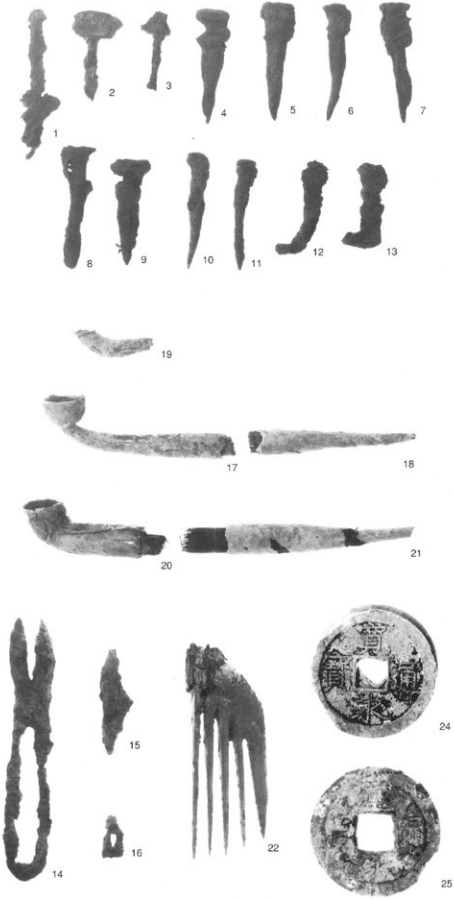

22

3

9

26

出土遺物（1）




出土遺物（2）

## 2．資料紹介・研究ノート

# 津山の弥生土器 4

中山　俊紀

## はじめに

前回まで「津山の弥生土器」として壺、甕、高坏、器台それぞれの通年的変化をたどり、概要をみてきたが、その最終目的は弥生土器の変化に成立期の津山の特質をなんとかうかがい知ることができないかということにあった。

家庭的な生産品である弥生土器は、それをとりまく社会的条件を反映しやすく、また考古遺物としてはあまねく発見されていて、地域間の比較が容易という特性をもっている。このため、地域社会の存在条件を比較する上で弥生土器は極めて有効な題材であろうと思う。

最終回にあたり壺、甕、高坏、器台と個別にたどってきた変化の特色を前提に、周辺地域との比較により、地域社会成立の起源及びその条件の変化を考えてみたい。

## 瀬戸内型甕とその分布

前期弥生土器のなかの地域性を示すものとして、東瀬戸内地方では深鉢形土器口縁部に断面が三角形をした凸帯を巡らす、いわゆる「瀬戸内型甕」（図１）がよく取り上げられる。秋山浩三は、この甕の分布について遺跡毎の出現頻度を広域に分析し、その中心が吉備地方にあること、出現頻度で区分すれば吉備を中心として同心円状の三分布図として面的に広がることを示している（図２、註１）。

出現頻度は、播磨、備前、備中、備後、讃岐、伊予に濃密で、そのことからは必ずしも吉備中心とはいい難いが、分布図の中央が吉備地方で、吉備と西伯耆、東出雲等との通交が開けていたことはこの図から推測してもよいだろう。もちろん津山の弥生前期遺跡では、京免遺跡でも高橋谷遺跡でも「瀬戸内型甕」の出現頻度は高く、久世町の五反遺跡でも似た状況である。

瀬戸内型甕発祥の地が吉備であるにしろないにしろ、前期後葉の時期には恐らく日常の親縁関係を主な契機として、地域的な土器様式が生み出されてきたのであろう。しかし、注意すべきは、分布圏として引かれる線は相対的なものであり、遺跡毎の出現頻度は一般に距離に比例しつつ漸移変化するが、排他を思わせる現象は認められないことである。あくまで共通の土器伝統の基盤にたった土器様式のなかでの変化で、その境は不明確でもある。

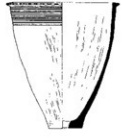


図１　瀬戸内型甕
（京免遺跡出土）

## 瀬戸内型甕の分布と広口の壺

中期前葉の直口壺で口縁部に貼付凸帯を巡らすものから変化したと考えられる「広口の壺」の分布をおってみると、瀬戸内型甕の分布と基本的に類似していることに気づく（図３）。初期の典型例と考えられるものは備前、備中、備後、讃岐、伊予などに分布し、また美作や西伯耆、東出雲などでも発見されている。しかし、瀬戸内型甕の分布と大きく異なるのは、近畿圏の分布が薄いことである。近畿地方でも、同様の発達の経過をたどった紀伊型と呼ばれる装飾壺（図３－12，13）があり、主として播磨、摂津、和泉、紀伊などの大阪湾岸の地域で発見されているが、それは瀬戸内地方のものと異なる変化をとげ、その後の出現頻度も大きくはない。

両者の対比で特徴的なことは、播磨地域が徐々に瀬戸内型甕の分布圏から離れ、近畿地方と土器様式上のつながりを深めていくことにある。

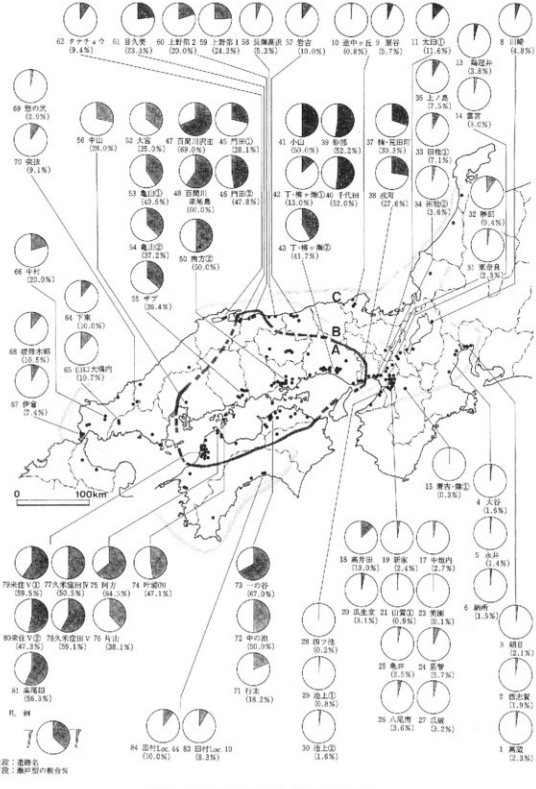



図２　瀬戸内型甕分布図（秋山浩三1992）

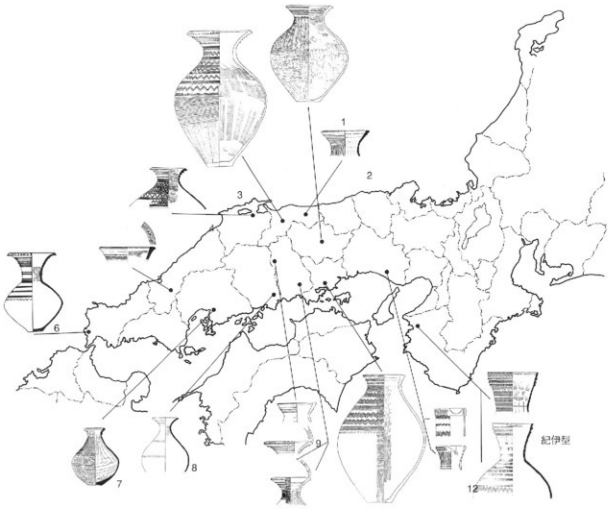



図3　広口の壷分布図

出土遺跡

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1沼E遺跡 | 2後中尾遺跡 | 3下山南通遺跡 | 4布田遺跡 | 5ヨレ遺跡 |
| 6土井ヶ浜遺跡 | 7大明地遺跡 | 8ザブ遺跡 | 9二野遺跡 | 10蓮池尻遺跡 |
| 11南方遺跡 | 12大野中遺跡 | 13岡村遺跡 | | |

長頸の壷C（広口壷）・・いわゆる垂下形口縁壷の分布と津山

口縁部端が大きく垂下する形態の壷はもともと近畿地方で発達したもので、近畿地方一円に広く分布する（図4）。この垂下形口縁壷が美作で時折みられたことから、中期の美作の土器は瀬戸内経由で畿内の影響を受けているとされてきた。しかし、細かく特長を比較すると、それらは近畿地方でも西北部、丹波、但馬、丹後などのものに特徴が近い。また、美作のみならず従来資料が少なく存在の不明であった因幡や伯耆でも似た特徴をもつ壷が近年発見されてきて、おおまかにいえば、西方形の垂下形口縁壷の分布は第4図の網のようになる、といえる。資料豊富な西播磨に依然として少ないという特徴の変化はなく、備前にはほとんどないということは、少なくとも「瀬戸内経由の影響」という常識に疑問を抱かせる。

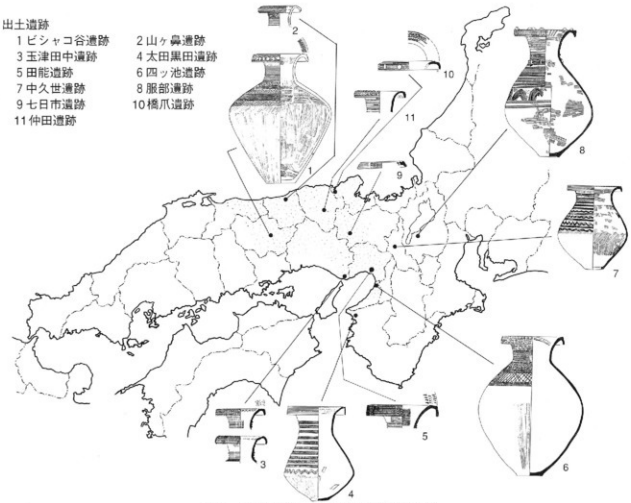



図4　長頸の壺C（垂下形口縁壺）分布図

長頸の壺B（広口壺）・・いわゆる「播磨型装飾壺」の分布と津山

長頸の壺Bは、普通「播磨型装飾壺」の影響を受けた壺と評価される。「播磨型装飾壺」は、加古川下流の溝之口遺跡などで多量に発見され「讃岐地方と中部瀬戸内的性格の二面性を持ちつつ、播磨地方独自の形態、装飾を見る土器」と評価されている（註2）。しかし伯耆の下山南通遺跡では同時期とみられる類似した壺が発見され、近時の断片資料から推測して、美作や因幡でもほぼ時を同じくして同種の壺が存在していた可能性は強い。

もともとこの壺は、大きく外反する口縁部上面に貼付凸帯を巡らす広口壺の伝統に属するもので、広く西日本広域に共通の基盤をもつ（図5）。勿論指摘のとおり対応する壺は吉備にも讃岐にも存在する。

先の指摘は重要ではあるが、代表的な「播磨型装飾壺」出土二地点の溝之口遺跡及び下山南通遺跡出土の壺（註3）を両にらみして断片的な資料から広く分布圏を推測すれば、南但馬（註4）や丹後（註5）、丹波（註6）、伯耆（註7）、出雲（註8）等にも同類の壺が存在する。加古川下流域で発見されているものが装飾要素で個性的であることは事実としても、同類の壺の分布という点でいえば、加古川下流域はその分布の東南端に位置することとなり、加古川下流域を必ずしも「播磨型装飾壺」の起源地と仮定する必要はない。

そうした目で長頸の壺B、Cの分布を重ねてみると、両者の分布が大きく重なり合うことが理解できる。そのことからいえば、もともと摂津、東播磨、丹波、但馬、丹後から北播磨、美作、因幡、伯耆、出雲等の地域は土器伝統を共有する部分が多かったともいえ、その大枠のなかで美作の土器伝統は発達していったと捉えることができる。

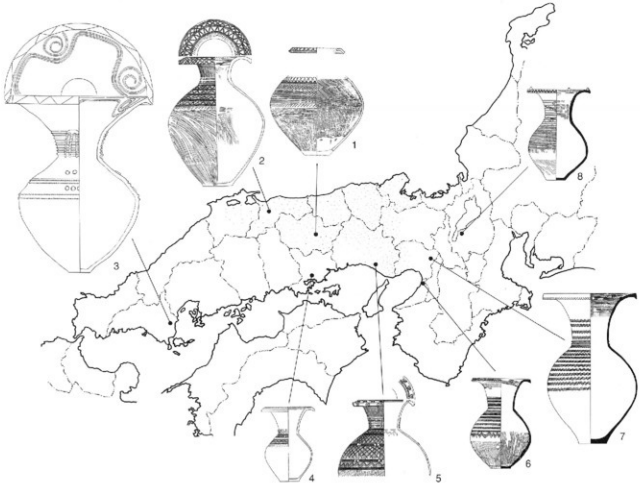


図5　長頸の壺B分布図

出土遺跡
1 崩塚遺跡　2 下山南通遺跡　3 柳井田遺跡　4 南方遺跡　5 溝之口遺跡　6 安満遺跡
7 服部遺跡

以上をまとめると、中期初頭は前期の土器伝統の中にあり、広口の壺はその流れの中に位置する。また、広口の壺が成立する頃、中期の美作の土器様式を規定する新しい土器伝統の複合基盤が成立する。この土器様式形成の契機は東西広範に及ぶ。中期の美作出土土器に東方的要素が強調されるが、東方要素は個別的影響を物語と捉えるのではなく、当初からの土器伝統成立の基盤のなかに一括含み込まれていた、と評価するほうが理解しやすいということになる。

**垂下口縁形器台の分布とその成立**

垂下形口縁壺（長頸の壺C）の口縁部と同様の特徴をもつ垂下形の大形器台(器台C)は、美作独自の発達をとげた土器とされる。なるほど今までは、ほとんどが美作でしか発見されず、備前（註9）の一例が知られていたのみであるが、近年国幡（註10）や東伯耆（註11）播磨（註12）でも少数発見されている。この器台も垂下口縁が顕著になるのは壺と同様中期後葉のことで、もともと垂下形口縁壺に触発され発達した可能性が強いので、さらに広範囲で見つかる可能性がある。

これと対応した器台分布を広くみると、畿内を中心に円孔透をもつ一群がみられ（註13）、備前、備中から西伯耆にかけ長方形の透孔をもつ一連の大型器台が分布し、当該地域の大型器台はそれぞれの特徴により大きく二分される。分布の点でも三者は原則として入り組むことはなく、ほとんどの地域はそのいずれかの伝統に属しているようである。なお、備前発見の垂下口縁形器台は美作からの搬入品という見方があるので、それは一応除外しておこう。

三者が入り組まないという前提で垂下口縁形器台の分布をみると、確実例は美作、因幡、東伯耆及び美作に接する部分の播磨に分布するということになる。ただし、但馬や北播磨では当該期の器台の資料が皆見に入らず、それが垂下形口縁壺に触発され成立した器種であると仮定すれば、その先行形式を含め、今後それらの地域からも発見される可能性は高い。

とはいえ、分布範囲は西方形の垂下形口縁壺の分布範囲より限定されることはほぼ確実で、南播磨、摂津、丹波、丹後などはみな畿内的な器台の分布圏となっている。

### 短頸の壺B（無頸壺）

垂下口縁形器台とともに美作独自の器形とされる独特の装飾壺で、美作以外では伯耆倉吉の後中尾遺跡（註14）で類例がある。畿内の同類の壺とのつながりも考えられ、東播磨に似たモチーフのものも存在するが（註15）、短頸の壺Bとそれらとには形態にかなりな隔たりがある。その状況から、垂下口縁形器台と類似した分布圏をもつ可能性がある。

### 鍔形高坏の分布と津山

鍔形高坏は畿内に起源する器種で極めて広範な分布をもつ。畿内一円は勿論、西播磨、備前、美作、出雲などにも類例があり、印象的には東中国山地から山陰にかけ分布が濃いようにみえる。

この系統の高坏は、畿内では鍔端部が大きく垂下していくが、美作では器台と異なり端部が水平かわずかに垂下するものに限られる（註16）。丹波や東・西播磨、（但馬？）発見の同種の高坏は垂下傾向が強く、美作に至るいずれかの地域からその発達の道筋を異にするらしい。この範囲も前二者と概ね一致する可能性がある。

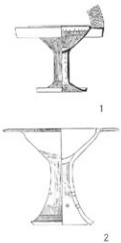



図6　鍔形高杯
1 瓜生堂遺跡
2 ビシャコ谷遺跡

後三者の分布の特性を要約すると、垂下口縁形器台を生み出すもととなった美作でよくみかけられる垂下形口縁壺は丹波や但馬、丹後、因幡など広範な分布圏をもつが、丹波や丹後は畿内的器台の分布圏となっており、また鍔形高坏変化の道筋も異にする。したがって、垂下口縁形器台の分布範囲は、垂下形口縁壺の分布範囲より限定されている。その成立のメカニズムや分布範囲は、今の所周辺資料が少なくつかみがたい。美作以外では鳥取市の山ヶ鼻遺跡でB類型とC類型の器台、鳥取県西伯郡名和町の押平第1遺跡でC類型の器台、佐用郡上月町の坊主山遺跡でB類型の器台、岡山市の百間川遺跡ではC類型の器台が発見され、また、短頸の壺B類似資料が倉吉市の後中尾遺跡からも発見されているので、中期後葉にいたり東中国山地から山陰海岸にかけ、より地域色をもつ一群の土器が成立したとはいえる。

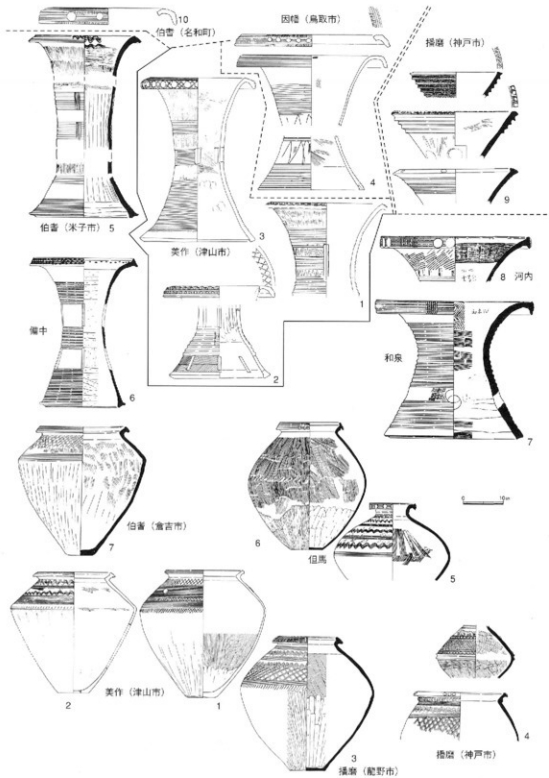



図7　各地の大型器台と短頸の壺B(縮尺1/10)

器台　1紫保井遺跡　2崩塚遺跡　3紫保井遺跡　4山ヶ鼻遺跡　5青木遺跡
6鹿田遺跡　7池上遺跡　8東奈良遺跡　9玉津田中遺跡　10押平第1遺跡
壺　1美作国府　2ビシャコ谷遺跡　3長尾・小畑遺跡群　4玉津田中遺跡
5ササ遺跡　6米里遺跡　7後中尾遺跡

**津山の後期弥生土器**

中期と対比して後期の弥生土器を考えるために、対象範囲をほぼ津山に絞り込み、特徴的な以下の3類型の土器を取り上げ、個々の遺跡でのそれぞれの出土状況を検討してみたい。

A類型の土器

鳥根県の九重遺跡出土土器を標識とする一群の土器（註17）で、類似土器は伯耆、因幡から北陸一円まで広範に分布する。しかし、美作では出土遺跡は限られ、古式の九重式類似土器は、津山では今のところ京免遺跡のみに限られる（註18）。壺・甕の二重口縁外面に櫛状工具により併行沈線文を施文することが特徴で、類似の土器は大田十二社遺跡（註19）、二宮遺跡（註20）、一貫東遺跡（註21）、鏡野町竹田遺跡（註22）などで発見されている。京免遺跡の他、隣接する大田十二社遺跡、二宮遺跡では比較的多く発見されているが、一貫東遺跡や竹田遺跡ではそれぞれ1点が発見されているのみで、まったく見つからない同時期の遺跡も多い。

久米町の領家遺跡（註23）では京免遺跡と同様古式の九重式類似土器が発見されており、同遺跡には多数の同種土器が存在する可能性がある。しかし、隣接する法事坊遺跡（註24）には同時期資料は多いにかかわらず、搬入品とみられる小型台付壺1点がみつかっている以外その種の土器はみあたらない。特定の遺跡で多量に製作され地域的にも拡散されていったが、地域全体の土器伝統をおしなべて変更するような直接的な影響は与えなかったらしい。

B類型の土器

畿内系ないしは摂磨系といわれるあらいたたき成形痕跡を器表にとどめる土器で、これにも多くの類似土器が存在する。A類型のものと同様、遺跡毎に発見頻度に大きな片よりがある。大神原遺跡（註25）や綾部遺跡（註26）、大田十二社遺跡などで類似土器が多量に発見されている。しかし、大神原遺跡に近い一貫東遺跡などでは、同時期資料が少なからず発見されているにかかわらず、たたき痕跡を器表にとどめる土器は一点も発見されていない。

C類型の土器

土師器に直接つながるシャープなつくりの薄手の土器で、因幡を中心に広く分布している。典型例は胴部器壁4㎜前後で精巧なつくりのものが多く、家庭で製作されたものというより、専業集団により量産された可能性が強い。同じ時期には、岡山県南部でも特徴的な薄手の甕が流行し、同様の性格のものと推測されているが、不思議なことにその手の甕は津山ではほとんど発見されていない。典型的なC類土器を出土する遺跡の調査例は少ないが、当該期の遺跡では多かれ少なかれ同類土器が発見され、その亜形を多く出土する遺跡も多い。

以上3類型の土器を基本に、それらの現象からどのようなことがいえるのかを以下考えてみたい。

A、B類型の土器とC類型の土器では影響の受け方に基本的な違いがある。C類型の一群は土師器につながる系統の土器で、相当時期のどの遺跡にも強弱のちがいはあれ影響を与えている。これに対しA、B類型の土器の典型例が発見されるのは特定の遺跡に限られ、その影響が直接みられるのも特定の遺跡という傾向が強い。

津山の後期の遺跡から発見される土器は遺跡毎の変異幅が大きいが、この現象の背景にあるのはC類型の土器ではなく、時期的に古いA、B類型などの「外来系」土器と仮定できる。そのメカニズムは、以下の現象から説明できる。

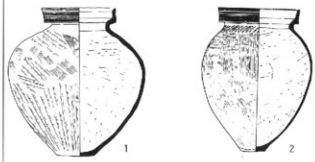
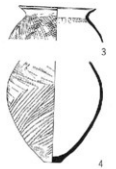
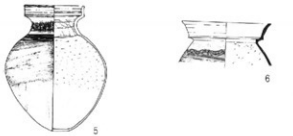
| 区分 | 典型例 | 特徴 |
|---|---|---|
| A |  | 島根県の九重式土器に類似する壺、甕などの一群。壺、甕、鼓形器台、台付壺などのうち二重口縁として立ち上がる口縁部外面に櫛状工具により併行沈線文の施文されているものをめやすとする。口縁部のつくりがシャープであまり立ち上がらず施文も流麗な原型に近いものから、口縁部立ち上がりが外湾し、屈曲部も角がとれ、施文が雑となる大幅に変容したものまでの幅がある。出土時間幅は、大田2期から3期にわたる。 |
| B |  | たたき成形痕を器表に残す壺、甕類全般を対象とする。そのほとんどは甕で在来の土器の特徴と入り混じった多くの変換形ないしは変容タイプが存在する。 |
| C |  | 洗練されたシャープな作りの薄甕類を代表とし、口縁部内外面は横なで仕上げ。肩部に櫛状工具による波状文を施文するものが多い。また、同様工具で胴部上半を横方向に刷毛目仕上げを行うものが多い。岡山県南部の酒津式併行期以降にみられる薄甕に対応するものと見られ、因幡方面からの影響を強くもっているとみられる。 |

表1　後期の「外来系」土器

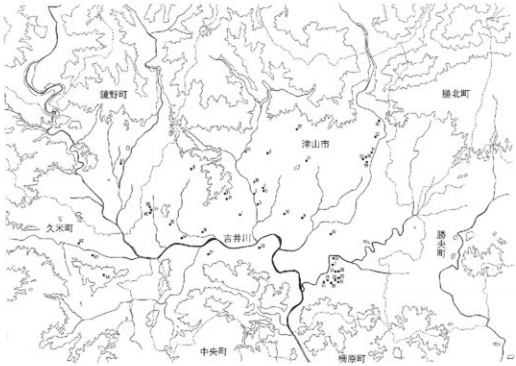



図8　後期遺跡分布図

| 旧郡名 | 遺跡名 | 時期 / 型式 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 苫田 | 沼E | 5 | ○ | × | × | × | × | |
| | 大田十二社 | 16 | ○ | A | A | B・C | B・C | A,B,Cとも数量多い。 |
| | 京免 | 2 | ○ | A | ○ | C | C | A,Cとも数量多い。 |
| | 竹ノ下 | 3 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | |
| | 内山 | 17 | ○ | ○ | × | × | × | |
| | 一宮 | 14 | ○ | A | ○ | C | C | A,Cとも数量多い。 |
| | 有本 | 38 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | |
| | 竹田 | 4 | ○ | ○ | A | × | × | 変容形1点のみ発見。 |
| | 有元 | 39 | ○ | ○ | × | × | × | |
| | 荒神峠 | 40 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | |
| 久米 | 桃山 | 36 | × | × | × | ○ | × | |
| | 津山口 | 37 | × | ○ | × | × | × | |
| | 落山 | 44 | × | ○ | × | × | × | |
| | 頭家 | 42 | ○ | A | ○ | × | × | Aはかなり存在するらしい。 |
| | 法事坊 | 43 | ○ | A | ○ | ○ | ○ | 搬入の可能性がある台付壺1点のみ発見されている。 |
| 勝田 | 天神原 | 18 | ○ | ○ | ○ | B | × | Bの数量多い。 |
| | 東蔵坊 | 34 | × | ○ | ○ | × | × | |
| | 綾部 | 35 | × | × | × | B | × | Bの数量多い。 |
| | 一貫東 | 20 | ○ | ○ | A | ○ | × | 変容形の甕1点のみ発見されている。 |
| | 大畑 | 24 | ○ | ○ | × | × | × | |
| | 小原 | 25 | ○ | ○ | × | × | × | |
| | 西古田 | 7 | ○ | ○ | × | × | × | |

表2　各類型土器の有無

＊時期は大田十二社遺跡後期5区分をめやすとする。おおむね、1、2期は後期前葉、3は後期中葉、4、5期は後期後葉。

1異なる系譜土器の間に、単純な要素の変換がみられること。

2異なる系譜土器の間に融合的な土器が生み出されていること。

1は、京免遺跡や穴田遺跡などで確実例が把握され、1を介在させれば2は津山のたいていの遺跡出土土器でその存在が把握できる。

したがって、「外来系」土器が基本となって津山の土器は大きく変容を受け、土器の多様性がうみだされたと考えてよい。

典型例としてA、B2類の土器をとりあげたが、津山からみて「外来系」土器はこの他にも多く、加えてそれらの相互作用が複雑にからまる例も少なくない。また、当然ながら2については共時的変化の他、通時的なものをも含んでおり、それらの結果、「外来系」土器の影響の強弱によって遺跡毎に別ものともみえる津山の後期土器の複雑な様相が生じることとなったといえる。

かって後期の土器の多様なあり方を複数の「外来系」土器伝統に起因するとみ、中期土器伝統の静的なありかたと比較して多系的、逆に中期の土器伝統を単系的と評価したことがある。そこに中・後期の土器伝統のあり方の基本的な違いをみたい。

**まとめ‥‥土器からみた津山の中・後期の弥生社会**

非常に斉一性の高い土器様式として、弥生前期土器は短時間のうちに西日本一帯に広まったとされている。それでも前期後半には徐々に地域色をもった土器も作られるようになり、その一例として瀬戸内型甕が取り上げられる。その分布は秋山により示されている先の分布図のように、中部瀬戸内を中心に伯耆や出雲などへも分布しており、出現頻度に階層差があって、遠隔地ほど段階的に出現頻度を減じていくという規則性があるようにみえる。

弥生中期に至り、近畿地方と中部瀬戸内地方の土器の地域差がより鮮明となり、その間で播磨地方は東西の変異を含みつつも、近畿地方の土器という様相を強めていく。その中で、「近畿地方と中部瀬戸内的性格の二面性をもちつつ、播磨地方独自の形態、装飾を見る土器」として「播磨型装飾壺」が登場するが、同類土器の分布は当初から美作や伯耆、因幡、但馬、丹後などを広く含むものであったらしく、「播磨型装飾壺」の広域分布圏が想定される。

「播磨型装飾壺」に遅れて発達する垂下形口縁帯はもともと近畿地方で発達する壺の一種であるが、近畿西辺部、摂津～丹後に至るルート近辺にそのうち独特の器形をもつ垂下形口縁帯があって、それは因幡や美作にも分布し、「播磨型装飾壺」の分布と大きくオーバーラップするらしい。

両者の重なる範囲は、もともと土器伝統共有圏としての性格を強くもち、その中で個々の土器形式が展開していったと捉えると理解しやすい（註27）。

中期後葉に至り垂下口縁形器台が発達するが、その分布範囲はどうみてもその重なり合う地域より狭く、その範囲のつながりの強さを想定させる他の現象もある。何らかの生態的な共通性が垂下口縁形器台を生みだす背景にあったことも想定されるが、結果として先の土器伝統共有圏の中にさらに小さな分節範囲を生み出していると考えざるをえない。

後期になると出雲、吉備などといった地域で中心をもった地域個性の強い土器様式が発達しだすが、津山の弥生土器にはそれらの影響が偏在して現れ、それぞれのその度合いによって遺跡毎の土器の様相に大きな変化を生じる結果となっている。間接的な個性の主張とはいえ、津山という小さな範囲の遺跡毎に多系的な土器の個性が主張されるという結果となっており、そういった状況から中期の土器伝統の

ありかたを眺め返すと、連綿とした広がりをもつ中期の土器伝統のもの静かな静的性格が浮かびあがってくる。敷衍すれば、美作の中期社会が地域個性を外に主張する必要も、また基盤にも乏しかったともいえる。恐らくは、基本的な社会関係は村内あるいは地域内関係にあって、広域の社会ないしは経済関係が社会の根底を規定することとはまだなっていなかったと想定される。

津山の弥生中期人にしてみれば、われらが土器は皆共通であり、同一イメージの土器を作り続けることもまた自明のことであった。したがって、どの集落でも共通の土器伝統の中から生み出される「われらが土器」を永年月にわたり繰り返し繰り返し作りつづけていったのであろう。

美作全体をながめても状況は変わらず、さらにずっと先もその先にも同じ土器を作りつづける集団がいた。意識するにしろしないにしろ、そこにつらなる人々の間には粗密の差はあれ共通の帰属認識が存在していたことは想像に難くない（註28）。

しかし、後期の「地域性を主張する土器」の流入は、こういった社会関係が根底から覆されたことを暗示している。土器の上からはそのメカニズムは説明しがたいが、ここ津山でも弥生後期に至り大きく社会の再編が加速したことは推測できる。

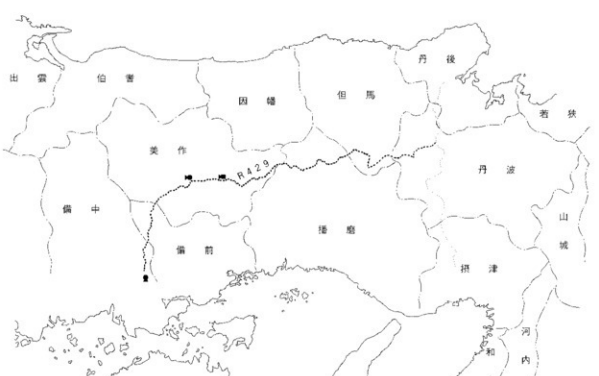



図10　国道429号線ルート図

## 余　談

津山から田熊をとおり植月を通過し真加部に抜け、大原から東粟倉に至る道が国道であることを意識する人は少ない。ふとしたことから、この行き先を調べて驚いた。兵庫県の千種町をとおり波賀を抜け朝来から福知山までほぼ直線でつづいていたのである。逆に日をやると加茂川町を抜け、足守から古代吉備中枢部に接続していた。不足識といわれそうであるが、まさに美作と但馬、丹後及び丹波、摂津などを結ぶ原始の幹線としてまことにふさわしいルートではないか。峰あってこの道を朝来まで通ったが、二ヶ所の難所を除き険しい起伏もなく集落は途切れることの少ない、いにしえの道として実にふさわしい風情があった。

さて、何に驚いたのだろうか。

大田十二社遺跡の調査後その報告書の作成で兵庫県教育委員会にお邪魔し、先年亡くなられた松下勝さんに日高町祖宜々森遺跡（但馬国分寺跡隣接地）の弥生後期の出土資料をみせていただいた。そこで大田十二社遺跡出土の器台によく似た小型器台（時期差はあるが）を発見した。さらに小型の鉢形土器は、津山で発見されるものとあまりにもよく似ていて、同行していた行田君と津山で出土してもまったく違和感がないなと話したほどだった。松下さんによると、その小型鉢は祖宜々森遺跡では毛色の違うものとのことでもあった。以後、彼我の行き来のルートに対する疑問が永らく頭の隅にあったことが一つ。もう一つは次のような疑問があったことによる。

弥生時代中期の美作の土器は畿内系土器の強い影響を受けているといわれてきた。その影響のルートとしていわれるのが、瀬戸内海経由で西播磨、あるいは備前経由で入ってきているというものであった。しかし、調査にたずさわった遺跡で発見される土器の特徴は、必ずしもそういったルートを想定してしっくりといかないものの方が多かった。

その二つの疑問の鍵となりそうに思えたからだった。

このたび、本稿を書くにあたり最近発見された資料に極力目をとおすことに努めたが、その目で調べると問題地域の土器資料が皆無に近い状況であることをあらためて認識した。それでも約２０年前に比べると瀬戸内側の資料は飛躍的に増大し、日本海側の資料も僅かながら新しく発見されていた。そういうわけで今回もまた見通しを語る以上には進められなかったが、以前よりも少しは現実に近づきつつあるように感じられる。

## 謝　辞

折にふれ兵庫県の弥生土器資料を送付いただいた故松下勝さん、友久伸子さん、同じく鳥取県の資料をいただいた木島稔夫さん、また本校の執筆にあたり突然の訪問にもかかわらず親切に出土土器を実見させてくださった兵庫県八鹿町教育委員会の谷本進さん、同朝来郡広域行政事務組合の田畑基さん、中島雄二さん、他多数の人々からご教示ご協力をいただきました。たいへん有り難うございました。

なお、本校は弥生土器の実証的な方法からみれば、たいへん乱暴で粗雑な内容を多く含みます。今後とも、ご叱正、ご教示をいただければ幸甚です。

註

＊本文中で旧国名を用いてきたがそれは単に便宜的なもので、現県名で記述するより説明に便利なためという理由による。したがって、必要に応じて播磨東部とか北部とか適宜用いているが、厳密な範囲を指し示しているわけではない。

1 秋山浩三「弥生前期土器－遠賀川式土器の地域色と吉備－」吉備の考古学的研究（上）山陽新聞社　1992

2 松下勝「播磨をめぐる弥生文化」松下勝著作集刊行会　1993

友久伸子「弥生時代の播磨型装飾壺－その文様にみる地域色」今里幾次先生古稀記念『播磨考古学論叢』同刊行会　1990

3「下山南道遺跡」鳥取県教育文化財団報告書２１　（財）鳥取県教育文化財団　1986

4 赤尾遺跡出土壺など。谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社　1992

5 橋爪遺跡などに類似資料が見られる。「橋爪遺跡」第５次発掘調査概報 京都府遺跡調査概報第87冊 京都府教育委員会　1999

6「七日市遺跡（Ⅰ）」第２分冊　兵庫県文化財調査報告書第72－2冊　兵庫県教育委員会　1990

7 森下哲也『後中尾遺跡』日本土器辞典　雄山閣　1996

8「天神遺跡第９次発掘調査報告書」出雲市教育委員会　1999

9 正岡睦夫「備前地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編 木耳社　1992

10「山ヶ鼻遺跡」Ⅰ・Ⅱ　（財）鳥取市教育福祉振興会　1995，1996

11「名和町内遺跡分布調査報告書」名和町文化財報告書第21集　名和町教育委員会　1998

（現物を確認しておらず、壺口縁の可能性もあるが、図上判断は当所職員の一致した見解である。）

12「本郷・大垣内・坊主山遺跡」中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（佐用編）　兵庫県教育委員会　1976

13 能野市尾崎遺跡、神戸市玉津田中遺跡、春日町七日市遺跡、三田市天神遺跡、同奈カリ遺跡、高槻市東奈良遺跡などに例がある。

14 森下哲也『後中尾遺跡』日本土器辞典　雄山閣　1996

15「玉津田中遺跡」第５分冊　兵庫県文化財調査報告第135－５冊　兵庫県教育委員会　1996

16 津山市西吉田遺跡、久米町稼山遺跡群、作東町高本遺跡出土例など

17 打田才、東森市良、近藤正「島根県安木平野における土壙墓」『上代文化』36　1965

18「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会　1882

19「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会　1981

20「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告26 岡山県教育委員会　1978

21「一貫東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集 津山市教育委員会　1992

22 鏡野町教育委員会のご好意で実見

23『領家遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８　岡山県教育委員会　1975

24『法事坊遺跡』『稼山遺跡群』久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告 久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979

25 天神原遺跡　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　岡山県教育委員会　1975

26 綾部遺跡　採集資料　文化財センター所蔵品 未整理

27 弥生前期土器は西日本全体が一様で、おおきくいえば広く面としての共通性を示す。地域色をもつ瀬戸内型甕の分布にしても面として分布していることは明かで漸移的分布を示す。中期の「播磨型」壺にしても、中期後葉の垂下形口縁壺の分布にしてもいずれも面として広がっているという分布のありかたに基本的に変わりはない。もちろん一つの土器自体には、素材の選択や形態、製作手法、文様、機能などさまざまな属性が統合されており、同類土器という認識は主観的印象による部分が多い。特定の属性に絞れば、主観的に同類とされる土器相互に根本的な相違点があるのかも知れないが、ここではあくまで一般的な印象を根拠に概要の把握につとめてきた。漸

移的な変化という点でいえば、例えば壺Bにしても、器種としては西日本広域にわたり広がっているが、分布を追っていくと連続的変異帯の中で変異界の存在が推測され、その推定された変異界は土器伝統の重層的な階層レベルの存在を前提にしてみても、単純な空間分布と大きくずれるという結果となった。

28「擬磨型装飾壺」、垂下形口縁壺、垂下口縁形器台の三者の関係をいうと、広がりとしては「擬磨型」装飾壺＞垂下形口縁壺＞垂下口縁形器台という関係がなりたつ。土器のありようが何らの集団帰属意識を反映しているとすると、帰属意識は、垂下口縁形器台＞垂下形口縁壺＞「擬磨型」装飾壺の範囲という関係もなりたつ。もともと、弥生前・中期の土器が「連続的変異帯」を形成するという前提にたてば、土器の特色が近い集団間の日常的な接触は、直接であれ間接であれ頻繁であったと仮定できる。そういう関係が仮定できれば、津山の人々の集団帰属意識の変遷もどのルートに沿ったものであったかがおのずと知れよう。なお長頸の壺Aのことにふれずに話しを進めたが、この点について補足しておきたい。初回に中期の基本となる長頸の壺二種は、同一の土器伝統の中の機能による変異にすぎないと説明した。そのうち長頸の壺Aはもっとも広域に分布し「連続的変異帯」を形成する壺で、基本的な器種である。長頸の壺B、Cの分布は先にふれが、A、B、C三者の関係は、A＞B＞Cである。その三種が一体として美作の中期後半の壺の伝統として組入れられていることは、あたかも帰属意識の変遷を再現するかのようである。

弥生土器実測図出典

図1　瀬戸内型壺

「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集　津山市教育委員会　1982

図2　瀬戸内型壺分布図

秋山浩三「弥生前期土器－遠賀川式土器の地域色と吉備－」「吉備の考古学的研究」（上）山陽新聞社　1992

図3　広口の壺分布図

1「沼E遺跡Ⅱ」津山市埋蔵文化財発掘調査報告8　津山市教育委員会　1981
2「後中尾式土器」森下哲也 日本土器辞典　雄山閣　1996
3「下山南通遺跡」鳥取県教育文化財団報告書21（財）鳥取県教育文化財団　1986
4「布田遺跡」国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　島根県教育委員会　1983
5（ヨレ遺跡）松本岩雄「石見地域、弥生土器の様式と編年山陽・山陰編　木耳社　1992
6（土井ヶ浜遺跡）山本一朗『防長の弥生土器』「山口県の弥生土器－集成と編年」周陽考古学研究所　1979
7（大明地遺跡ＳＢ9）「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ」（財）広島県埋蔵文化財センター　1987
8（ザヴ遺跡）山陽新幹線建設予定地内遺跡発掘調査報告　広島県教育委員会　1973
9（二野遺跡４Ｃ区谷包含層）「二野遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15　岡山県教育委員会　1977
10「蓮池尻遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62　岡山県教育委員会　1986
11「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会　1971
12「諸之口遺跡」（加古川市中西抵地遺跡採集の上器）松下勝著作集Ⅰ播磨をめぐる弥生文化」松下勝著作集刊行会　1993
13（人野中遺跡）上井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ　木耳社　1989
13（岡村遺跡）上井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ　木耳社　1989

図4 長頸の壺Cの分布図

1 「ビシャコ谷遺跡」 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集　津山市教育委員会　1984
2 「山ヶ鼻遺跡」Ⅰ・Ⅱ　(財) 鳥取市教育福祉振興会　1995、1996
3 「玉津田中遺跡」第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135－5冊 兵庫県教育委員会　1996
4 (太田黒田遺跡) 井戸11 上井孝之「紀伊地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ　木耳社　1989
5 (田能遺跡) 4調査区土壙6896 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
6 (四ッ池遺跡) EW54北K-土坑 樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
7 (中久世遺跡) 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
8 (服部遺跡) SX (M) 273 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
9 「七日市遺跡 (I)」第2分冊　兵庫県文化財調査報告書第72－2冊 兵庫県教育委員会　1990
10 「横爪遺跡第5次発掘調査概報」京都府遺跡調査概報 京都府教育委員会　1999
11 (伸田遺跡) 谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年 山陰・山陰編　木耳社　1992

図5 長瀬の壺Bの分布図
1 「楯塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 津山市教育委員会　1989
2 「下山雨遺跡」鳥取県教育文化財団報告書21　(財) 鳥取県教育文化財団　1986
3 (柳井田遺跡) 山本一朗「防長の弥生土器」「山口県の弥生土器－集成と編年」周陽考古学研究所　1979
4 「南方遺跡発掘調査概報」　岡山市教育委員会　1971
5 「満之口遺跡」(加古川市中西低地遺跡採集の土器) 松下勝著作集「播磨をめぐる弥生文化」
松下勝著作集刊行会　1993
6 (安満遺跡) 東部方形周溝墓群V区ⅡC期　森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ 木耳社　1990
6 (四ッ池遺跡) 81北K-SD006溝 樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
7 (勝部遺跡) SX (M) 143 森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
8 (服部遺跡) 森岡秀人「山城地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990

図6 擬形高坏
1 (瓜生堂遺跡) 上層遺構　寺沢薫・森井貞雄「河内地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ　木耳社　1989
2 「ビシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集　津山市教育委員会　1984

図7 (上) 大形器台
1 (紫保井遺跡) 中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」古代吉備第15集　古代吉備研究会　1993
2 「楯塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 津山市教育委員会　1989
3 (紫保井遺跡) 中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」古代吉備第15集　古代吉備研究会　1993
4 「山ヶ鼻遺跡」Ⅰ・Ⅱ　(財) 鳥取市教育福祉振興会　1995、1996
5 (青木遺跡) 清水真一「四轡、伯耆地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社　1992
6 (廻田遺跡) 土坑117　正岡睦夫「備前地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社　1992
7 (国府遺跡) 土坑3　寺沢薫・森井貞雄「河内地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ　木耳社 1989
8 (池上遺跡)　樋口吉文 「和泉地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
9 (東奈良遺跡)　森田克行「摂津地域」弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ　木耳社　1990
10 (玉津田中遺跡) 第5分冊 兵庫県文化財調査報告第135－5冊 兵庫県教育委員会　1996
11 (押平第1遺跡)「名和町内遺跡分布調査報告書」名和町文化財報告書第21集　名和町教育委員会　1998

図7（下）須恵の壺B

1（美作国府跡）安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」古代吉備第17集　古代吉備研究会　1995

2 |ビシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集　津山市教育委員会　1984

3「長尾、小加遺跡群」龍野市文化財調査報告21　龍野市教育委員会　1999

4「玉津田中遺跡」第5分冊　兵庫県文化財調査報告第135－5冊　兵庫県教育委員会　1996

5（ササ遺跡）谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社　1992

6（米里遺跡）谷本進「但馬地域」弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社　1992

7『後中尾式土器』　森下哲也　日本器辞典　雄山閣　1996

# 津山城今昔④　～再建天守と博覧会～

行田　裕美

## 1．はじめに

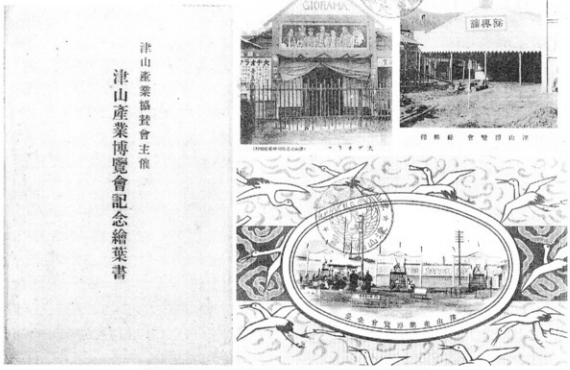
津山城の天守閣は昭和20年の終戦の年に空襲の目標になるという理由で取り壊されたと思われている方が案外多い。今でもそのことを耳にする機会が多い。この時取り壊されたのは昭和11年に開催された博覧会の呼び物の一つとして建てられた模擬天守のことである。元々の津山城の天守閣は明治７年から８年にかけて解体撤去されており、大きな時代錯誤が生じている。これに関しては津山郷土博物館学芸員尾島　治が1991（平成3）年5月号の『広報つやま』に「津山学ことはじめ⑫ーまぼろしの津山城天守閣ー」と題して事実関係を明らかにしている。

しかし、再建天守に直接接してこられた世代の方々の中には、今もってその事がなかなか受け入れられていないようである。ここではこのような誤解をとくために、前述の広報と重複する部分もあると思うが再度再建にいたる経緯及びどのような天守が建てられていたのかについてふれることにしたい。

その前に、過去津山城跡を中心に３回の博覧会が　開催されているのでその概要を紹介しておくことにする。

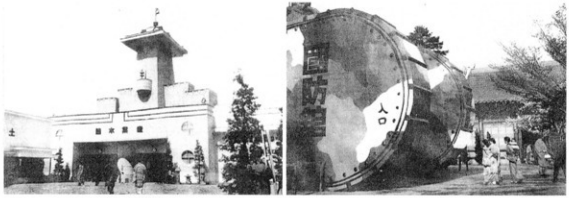
## 2．津山産業博覧会

最初の博覧会は1917（大正６）年4月20日から5月19日までの30日間にわたって開催された「津山産業博覧会」である。ちょうど第一次世界大戦の真っ只中であり、将来の経済戦争に備えた産業の振興を目的に、日本産業協会と津山産業協会の協賛で開催されたものである。本会場は伏見町の浮田佐平所有地3,000坪を借用している。展示館は以下のとおりである。



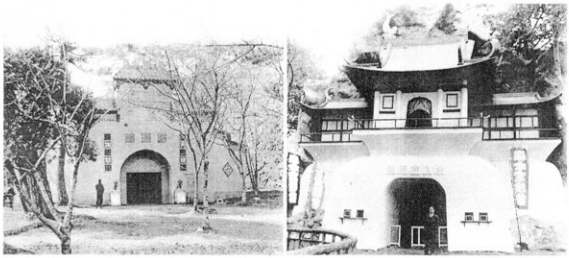

「津山産業博覧会」記念絵はがき表装と絵はがき２種

「産業振興大博覧会」絵はがき表装３種



産業本館

手前：国防館　奥：朝鮮館



満州館

海女実演館

「産業振興大博覧会」絵はがき４種

第１号館　津山町の出品物（呉服商の母子人形等）
第２号館　大阪の出品物（金光鶴・白動車・嫁入道具等）
第３号館　県下の出品物（蚕児孵化状況・特産重要物産等）
第４号館　県外の出品物
機械館　電気動力で動く諸機械
余興館　舞踊・奇術・落語・喜劇等
日光模型館　絵図・建築模型等

この他にも、商店街では店頭装飾競技会、本源寺では教育品展覧会、鶴山館では書画展覧会、宮川では魔術・映画・軽業などのイベントが行われた。

**３．産業振興大博覧会**

２回目の博覧会はは津山城跡を中心に、1936（昭和11）年３月26日から５月５日までの41日間にわたり開催された「産業振興大博覧会」である。この博覧会は昭和９年の室戸台風による水害、同10年の市財政の悪化など暗い話題続きの中で、姫津線全線開通を記念して市全体の活況を取り戻そうとの願いから実施されたものである。主な展示館は産業本館、観光館、農林機械館、国防館、満州館、朝鮮館、台湾館、衛生館、電気館、家庭文化館、海女館、お化け館、特設演劇場、教育館などである。

博覧会最後の締めくくり行事の商工祭では名士総出演による仮装行列が評判を呼び、市街地が埋まるほどの人出であったと言う。

この博覧会の呼び物になったのが後で述べる“張りぼて”の愛称で親しまれた再建天守である。

また、この博覧会とは直接の関係はないが、1937（昭和12）年４月１日から30日まで、津山商工会議所の主催により「勤王の美作と郷土文化展覧会」が開催されている。

「勤王の美作と郷土文化展覧会」
記念絵はがき表裏

博覧会記念マッチ２種
（左：産業振興大博覧会
右：市制20周年記念大博覧会）

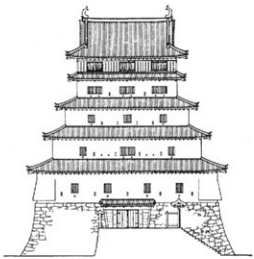
### 4．市制２０周年記念博覧会

３回目の博覧会は1959（昭和24）年が市制施行20周年になるのを記念して、4月1日から5月10日まで開催された「市制20周年記念博覧会」である。主会場は津山城跡に、特設演芸場は市役所東隣に設置された。津山城跡に建てられた主な展示館は農業館、郷土産業館、花人形館、防犯館、こどもの国などである。本丸跡には野外劇場が開設され、連日喜劇・歌謡曲などが披露された。併せて、特設演芸場では素人芸能大会、名士謎し芸大会、美術展等が開催された。

### 5．再建天守

第２回目の博覧会、姫津線全線開通記念「産業振興大博覧会」の呼び物の一つとして建てられたのが再建天守である。"張りぼて"の愛称をもつ模擬天守である。この天守は表面上は協賛会が建造したことになっているが、実際は津山商工会議所が建てたと言っても過言ではないとされている。建設費は8,384円85銭で大阪装飾会社の施工によるものである。

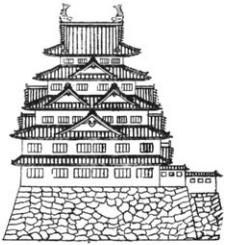
内部は地階が事務所、１階と２階が宝物陳列所、３階がジオラマ場、４階が展望所と記念品販売所として使用された。「小さい」とか「上がり下りが急だ」とか「何もないのに金を取る」とか不評もあったが、期間中76,675人が入場した。入場料は大人10銭で、6,135円に挙がった。ちなみに博覧会全体の入場



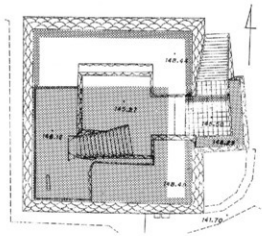
東立面図

北立面図

津山城天守（『近世建築史論集』より）



再建天守南立面図（絵はがきより）



天守台と再建建物（アミ目）位置関係（1/500）

者は196,075人であり、総入場料は37,997円余りに達した。

この建物は博覧会終了後40日以内に取り壊す契約であったが、建築側が欠損になり撤去できず残されたままとなり昭和20年の終戦の年をむかえたのである。

しかし、最終的に空襲の目標になるということで、8月2日～13日にかけて取り壊された。従って、再建天守が存続したのは9年と5ケ月の期間ということになる。この間に津山城を訪れた人が天守が建っているのを記憶に留めておられるのは当然のことである。

では再建された建物とはどのようなものだったのだろうか。再建されたのは天守の他に入口と門・塀である。再建天守の平面規模は本来のものに比べて3分の2に縮小されている。従って、本来の天守は正方形の平面プランであるのに対し、再建時のものは長方形に近い平面プランになっている。このことは今も残るコンクリートの基礎が物語ってくれている。

次に、屋根であるが本来のものは瓦葺きで棟は南北方向に向いているが、再建時のものはトタン葺きで棟は東西向きである。また、本来の天守は各層の屋根に破風を持たないという非常に特色のある造りであるが、再建時のものには千鳥破風が付設されていることなどが大きな違いである。

以下、写真と図面でそれぞれを比較していただきたい。この小文が津山城本来の天守は明治の初めに取り壊され、終戦の年に壊されたのは“張りぼての天守”であったことを認識していただくと同時に、再建天守を実際にご覧になった方の思い出話に花を咲かせていただく機会になれば幸いである。

最後になりましたが、小稿を草するにあたって絵はがき等の資料を提供していただいた緑工町の園米博明さん、東新町の菊田次郎さん、吹屋町の百済　修さん、そして所蔵写真の使用を快諾いただいた江見写真館の江見正暢さんにお礼申し上げる次第である。

**《参考文献》**

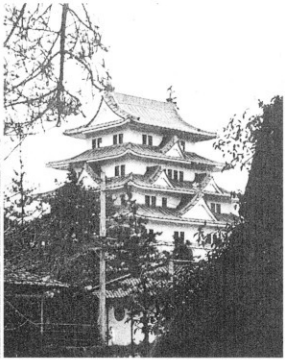
『津山産業博覧会案内』　1917年
『津山市史』第7巻　1985年
『津山学ことはじめ⑫－まぼろしの津山城天守閣－』『広報つやま』No.439　1991年
『津山商工会議所六十年のあゆみ』　1992年

右上が建設工事中の天守である。中央の大きな建物はパビリオンである。現在の赤堀テニスコート、文化センターの駐車場にあたる。左は産業本館、右は観光館である。さらにその右側に入場門がある。

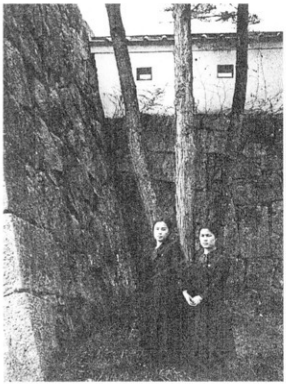
女性がいるのは五番門南側の石垣である。傾中櫓の西側から写したものである。屋根には千鳥破風がある。窓はガラス張りである。

再建天守２景（江見写真館蔵）

南東方向から写したものである。下の石垣は本丸御殿と天守を画し、五番門へと通ずる。



北東から写したものである。右の高石垣は薬種櫓の石垣である。



天守入り口部南側の塀を南から写したものである。左の石垣は天守台東石垣である。

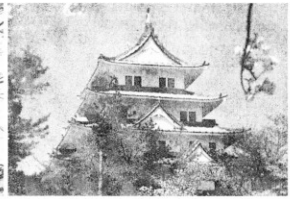
天守入り口を北東から写したものである。石垣の上が天守一層部分、左側の屋根は門である。

再建天守４景（江見写真館蔵）

北東から

北東から

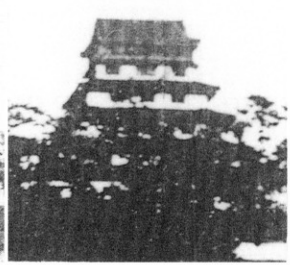
北西から



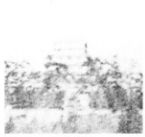
東から

再建天守4景（絵はがきより）

北西から



西から



西から

南西から

南から

南東から

明治初年撮影津山城天守6景

年報
津山弥生の里
第7号（平成10年度）

平成12年3月31日

発行　津山市教育委員会
　　津山弥生の里文化財センター
　　岡山県津山市沼600-1

印刷　有限会社　美　成
　　岡山県津山市平福177-2